第３章　京都大学北部構内BF30区の発掘調査

千葉　豊　古賀秀策　冨井　眞
伊東隆夫*　宮武頼夫**　初宿成彦**

1　調査の概要

今回発掘調査を実施したBF30区は，京都大学北部構内のほぼ中央に位置し，北白川扇状地の西端にあたる（図版１-229）。ここに農学部農芸化学科等校舎の新営が計画されたため，これまでの調査成果を勘案し，予定地全域530㎡の発掘調査を実施した。発掘調査は1994年７月18日に開始し，1995年１月９日に終了した。

本調査区は，縄文時代の遺跡として著名な北白川追分町遺跡に含まれる。本調査区の東に隣接する56地点，135地点では，縄文晩期の埋没林が検出されており，今回の調査でも同様の成果が当初より期待された。また，縄文時代以降についても，54地点で弥生時代の方形周溝墓や平安時代末～鎌倉時代初頭の火葬塚，135地点で中世の溝群などが知られており，縄文時代から中・近世にいたる資料が得られるものと予想された。

調査の結果，実験排水路で遺跡の一部が破壊されていたものの，中世の溝群，平安時代の墓，弥生時代の方形周溝墓，縄文時代の貯蔵穴や植物遺体層などを検出し，縄文時代から江戸時代にまでおよぶ整理箱52箱の遺物を得ることができた。

なお本文は，第５節を伊東，第６節を宮武・初宿が執筆し，歴史時代の遺跡については古賀，縄文時代の遺物に関しては冨井，それ以外を千葉が分担して執筆した。

2　縄文時代の遺跡

(1) 調査の経過

弥生中期以降の発掘調査が終了した後，洪水性堆積物である黄色砂を機械を用いて掘削し，縄文時代の遺跡の調査にとりかかった。調査区周辺の現地形は，東から西へ緩やかに下る斜面を呈しているが，縄文時代にはこれと大きく異なり，南東から北西へ向けて急激に下がる斜面を形成していたことが135地点の発掘調査によって判明していた。このため，地形の傾斜にほぼ直交する南東―北西方向の中央畔とＹ＝2540のラインで南北方向の畔を設定し，さらに調査区周囲の壁面で層位の観察をおこなうことにした（図24）。

*　木質科学研究所　**　大阪市立自然史博物館

縄文時代の堆積物は，砂層，砂礫層とシルト層がほぼ互層をなして厚さ約３m堆積しており，低位のシルト層の一部は，未分解の植物を多量に含む泥炭質土層を形成していた。この層中には，木材や葉，種実類，昆虫遺体など，通常の遺跡では残りにくい自然遺物が良好な状態で遺存していた。これらの自然遺物については，構内座標に基づいて１m四方のグリッドを設定して取り上げたほか，４地点で土壌を採取し水洗選別をおこなって，微細遺物の回収につとめた。また，人工遺物については，トータルステーションと電子野帳を用いて，出土地点を記録した。

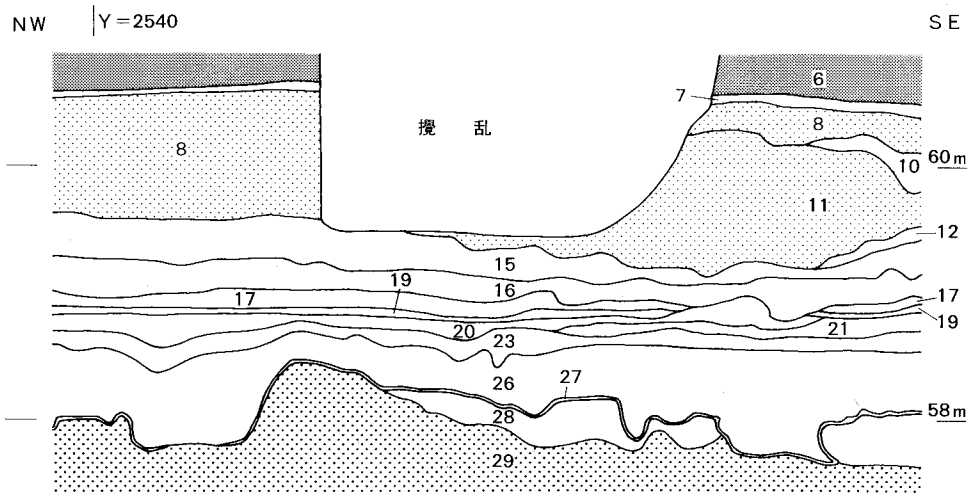
(2) 層位と地形（図版13・14，図23・24）

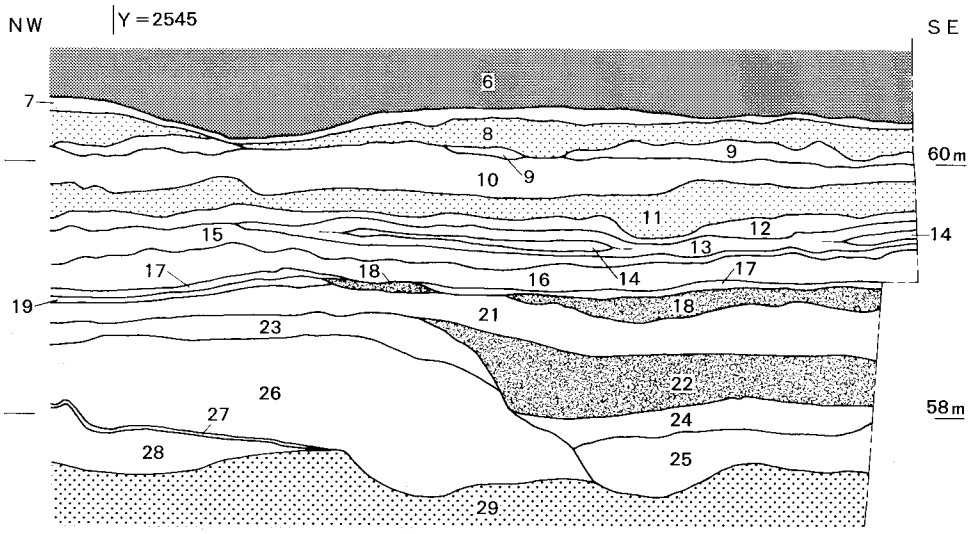
黄色砂以下，弥生中期以前の堆積層を30枚確認した。黄色砂に覆われていた暗褐色土（第７層）を除いて，これらはいずれも水の影響を強く受けて形成された堆積物である。調査区中央畔を用いて基本的な層位を説明しよう。

黄色砂（第６層）は，厚さ約0.6m，弥生前期末～中期初頭の土石流にともなう堆積物で，吉田キャンパス東半一帯にかけて広く分布する。暗褐色土（第７層）は，腐植混じりの土壌化した堆積物で，その上面は弥生前期末ごろの地表面である。縄文晩期から弥生前期の遺物を含んでいる。

暗褐色土より下位の堆積物は，堆積時期と堆積状況の違いから４群に分けることができる。上の群からみてゆくと，１群は第８層～第11層で，砂礫・砂が卓越している層群である。強い水流の影響によって形成された堆積層である。白色砂礫１（第８層）はＹ＝2540，白色砂礫２（第11層）はＹ＝2543付近で，南北方向に厚い堆積がみられ，南東から北西へ向けて流れたと思われる自然流路内の堆積物である。今回の発掘調査で得られた人工遺物の大半は，この砂礫層から出土していて，縄文中期～晩期末までの遺物約1500点を含む。

２群は，第12層～第25層で，砂・シルトと泥炭質土から構成されている。緩やかな水の流れか，間接的な水の影響によって形成されたと思われる層群である。泥炭質土（第18，第22層）は４枚認められた。このうち，泥炭質土１・４は中央畦付近には分布せず，泥炭質土１は調査区東壁中央付近で明褐色シルト（第15層）の下位，泥炭質土４は調査区南壁東辺で黄白色粗砂（第24層）の下位で確認され，調査区外へと続いていた。これらの泥炭質土層は北東から南西へ蛇行しながら流れる自然流路SR2内に堆積したもので，56・135地点の調査で，泥炭質土あるいは黒色土として記載された土層に相当するとみられる〔京大埋文研85，BF31区調査班87〕。泥炭質土３の層中で，貯蔵穴SX4を検出した。２群の層群からは，縄文時代晩期中葉～後葉の遺物が65点出土した。





6 黄色砂	12 明褐色シルト1	18 泥炭質土2	24 黄白色粗砂
7 暗褐色土	13 紫灰色シルト1	19 紫灰色シルト2	25 灰白色粗砂
8 白色砂礫1	14 青灰色シルト1	20 青灰色シルト2	26 青灰色粘土
9 淡褐色細砂	15 明褐色シルト2	21 灰白色微砂	27 マンガン固結層
10 灰褐色砂質土	16 白色粗砂	22 泥炭質土3	28 褐色土
11 白色砂礫2	17 明褐色シルト3	23 紫灰色シルト3	29 褐色砂礫

0　3m

図23　調査区中央畦南壁の層位　縮尺1/60

3群は，第26層で，青灰色の粘土ないしシルト質の土層である。マンガン固結層（第27層）をはさんで，第28層の上に堆積する。縄文時代後期後葉の遺物が出土している。

4群は，第28・29層である。褐色土（第28層）は部分的な堆積で，褐色砂礫（第29層）の風化土壌とみられる。第28・29層の上面は著しく凹凸する。両層とも遺物は出土していない。褐色砂礫は，56地点の最下位で認められた褐色礫層に対応するものとみられ，高野川系の河床礫であろう。

図24は，下段に泥炭質土3上面とそれに対応する面の地形，上段に暗褐色土上面の地形を示し，縄文晩期から弥生前期への地形の変遷をみたものである。泥炭質土3上面では，蛇行しつつ北東から南西へむかう自然流路SR2がみられ，泥炭質土はこの流路内に堆積したものである。56・135地点の調査で，流路の東肩は北西から南東へ急激に上がる斜面となることが明らかとなっており，扇状地の末端部にとりつくように形成された流路であることがわかる。一方，暗褐色土上面では，流路はすでに埋積して起伏の少ない地形に変化している。Y＝2545付近で，南北方向にはしる幅2m前後の溝状の落ち込みがみられた。

(3) 遺　　構（図版14，図25）

自然流路については，すでに前項でふれたので，ここでは人工的に設けられた貯蔵穴について報告したい。

貯蔵穴SX4は，流路SR2の西側斜面，泥炭質土3を調査中に検出した。検出面での広がりは，傾斜の方向に約110cm，それに直交する方向に約70cmである。この面では掘り方を確認することができなかったため，断ち割って観察した結果，上面の広がりよりも一回り小さな掘り込みがあることが判明した。その規模と形態は，傾斜の方向に約60cm，それに直交する方向に約45cmの平面楕円形で，深さ約25cmであった。底面，側壁いずれにも意図的な施設は認められず，南東へ下がる斜面をほぼ垂直に掘り込んだだけの簡単な構造である。なお写真図版では，数点の木材が見えているが，これらはこの遺構構築以前にすでに堆積していたものであり，直接の関連はみとめられない。

この穴の中に，トチノキの実が詰め込まれていた。その個数は約2,000個で，木の葉等で内部を区画することもなく，収められていた。実は外果皮を取りはずした種子の状態で，ほとんどが完存していた。トチノキの実以外のドングリ類も数十個含まれているが，破損しているものが多く，これらは二次的な流入によると想定する。人工遺物は出土しなかった。泥炭質土3から出土した人工遺物は多くないが，SX4の近くで出土した土器片から判断して，縄文時代晩期中葉，篠原式〔家根94〕ごろのものと理解する。

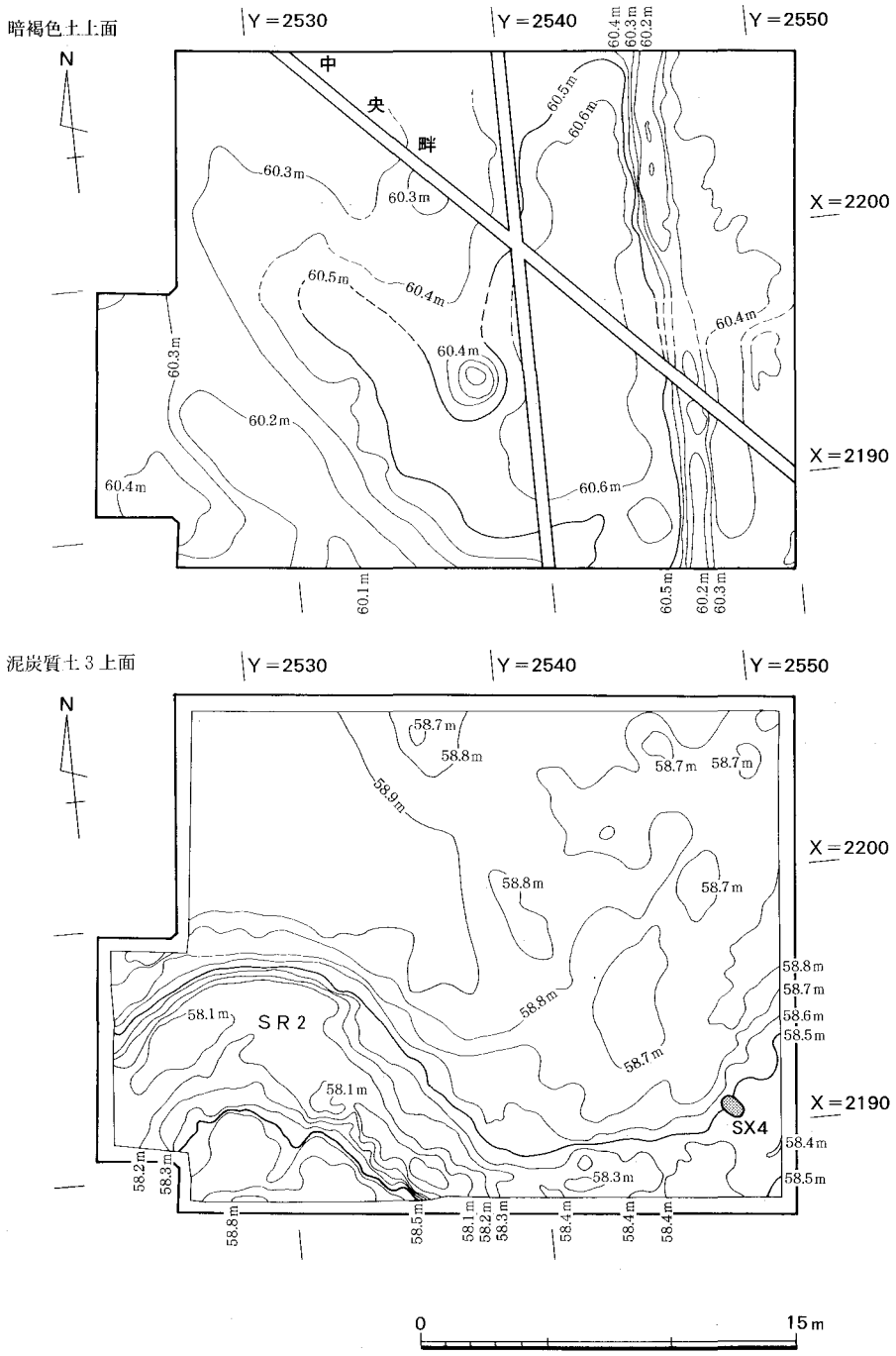


図24　暗褐色土上面，泥炭質土３上面の地形　縮尺1/300

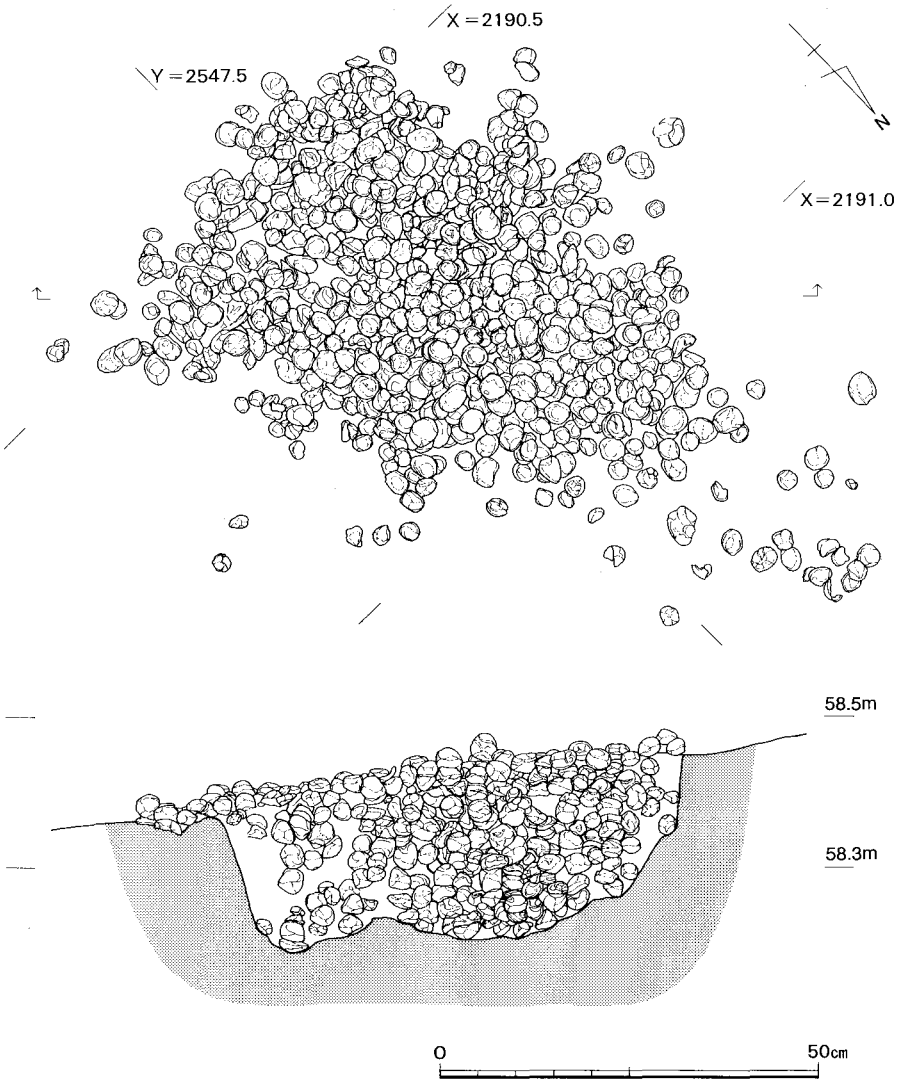


図25　貯蔵穴SX4　縮尺1/10

泥炭質土３の層中におけるトチノキの実の分布状況を見てみると，貯蔵穴 SX4 の周辺ではあまりみられず，Y＝2530以西のSR2西辺に集中していた。これらのトチノキの実は，SX4 とは異なって比較的広い範囲に分布し，外果皮がついたままの状態のものが多いという特徴がみられた。これらは，自然落下の状態を示すと考えられる。一方，SX4 周辺ではクスノキ科の落葉小高木アブラチャンの果実が集中的に見つかった。これらもその状況から見て，自然落下を反映したものであろう。

(4) 出土遺物（図版15～23，図26～43）

縄文土器，石器の順で，土器は出土層位別，石器は器種別に，それぞれ説明を加える。土器は，中期後半，中期末，晩期後半に帰属するものが多数を占め，これに前期と後期のものが微量加わる。大半は細片だが総数は2,000点を超え，そのうちで型式を判別できる破片の多くを抽出した。これらはおもに白色砂礫１層から出土している。

暗褐色土出土土器（Ⅱ１～Ⅱ32）　中期から晩期の土器が出土している。Ⅱ１～Ⅱ16の中期の土器では，Ⅱ１～Ⅱ３は深浅縄文地文を特徴とする船元Ⅳ式である。口縁部及び胴上部のⅡ１・Ⅱ２は縄文地に半截竹管状工具で施文している。Ⅱ４～Ⅱ８は撚糸文を特徴とする里木Ⅱ式。Ⅱ４の口唇部は無文だが面取りがある。Ⅱ４～Ⅱ６は撚糸文地に半截竹管状工具で施文している。撚りの確認できるものはⅡ６～Ⅱ８で，すべて１段左撚である。Ⅱ９～Ⅱ16は北白川Ｃ式。以下の分類は泉拓良のそれ〔泉85〕に準拠する。Ⅱ９は深鉢Ａ類で，渦文を描く隆帯上に１条の沈線が備わり，渦の中心で隆帯わきの沈線と連結する。内面には直前段２条の２段左撚の縄文が横走する。Ⅱ10は星田系の深鉢Ａ類で，縄文は直前段２条の２段左撚。Ⅱ11は深鉢Ｂ類で，口唇部の縄文は２段左撚である。Ⅱ12は星田系の深鉢の胴上部で，縄文は２段左撚。Ⅱ13・Ⅱ14は縄文地の深鉢。前者は口唇部にも，後者は口縁内面にも，２段左撚の縄文がある。Ⅱ15は帯縄文の胴部で，縄文は右撚である。Ⅱ16は無文の浅鉢で，外面は丁寧な撫で。

後晩期のものでは，Ⅱ17が北白川上層式の胴部。Ⅱ18は元住吉山Ⅰ式で，口縁内面の縄文は２段左撚。Ⅱ19は後期の条線地深鉢で，口唇部には胴部と同じ原体による刻みがある。Ⅱ20は突帯に刻みはないが口唇部を面取りしている滋賀里Ⅳ式。Ⅱ21～Ⅱ28は船橋式か長原式。以下，滋賀里Ⅴ〔田辺・加藤編73〕とする。突帯の刻みについては，Ⅱ21はＯ字，Ⅱ22はＤ字，Ⅱ23・Ⅱ24は無刻み。頸部のⅡ25はＤ字刻み。なお，Ⅱ24は内面に成形痕が顕著に確認できる。底部は，Ⅱ26は外面二枚貝条痕で，中央がわずかに凹む。Ⅱ27・Ⅱ28は外面磨き。Ⅱ26・Ⅱ27の内面は粘土帯接合部で剝離している。Ⅱ29～Ⅱ32は帰属時期不明の無文口縁である。Ⅱ29は内外面とも条痕，Ⅱ30は内外面とも磨き。

白色砂礫１出土土器（Ⅱ33～Ⅱ214）　前期から晩期のものが得られた。Ⅱ33～Ⅱ36は前期の北白川下層式である。Ⅱ33は縄文地に突帯をもつⅡｂ式ないしⅡｃ式。Ⅱ34は２段右撚の縄文地に特殊突帯をもつⅢ式。Ⅱ35・Ⅱ36は縄文地の胴部で，Ⅱ35は羽状縄文が横走する。Ⅱ36の縄文は２段左撚で０段は４条と思われる。

中期のものでは，Ⅱ37～Ⅱ39は船元Ⅱ式である。Ⅱ37は口縁端部の隆帯上を刻んでいる

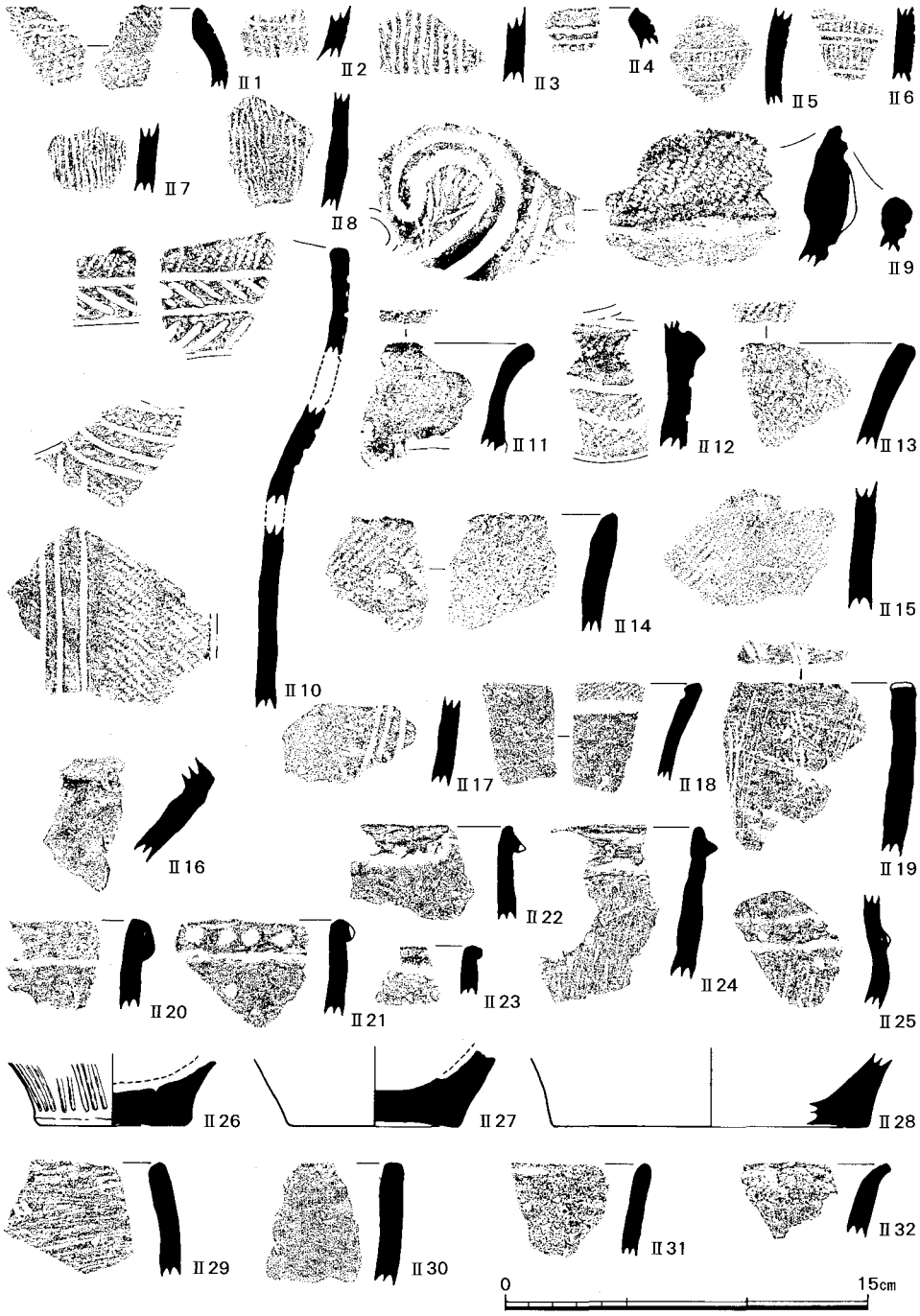


図26　暗褐色土出土土器（Ⅱ１～Ⅱ16中期，Ⅱ17～Ⅱ19後期，Ⅱ20～Ⅱ28晩期，Ⅱ29～Ⅱ32無文）
縮尺1/3

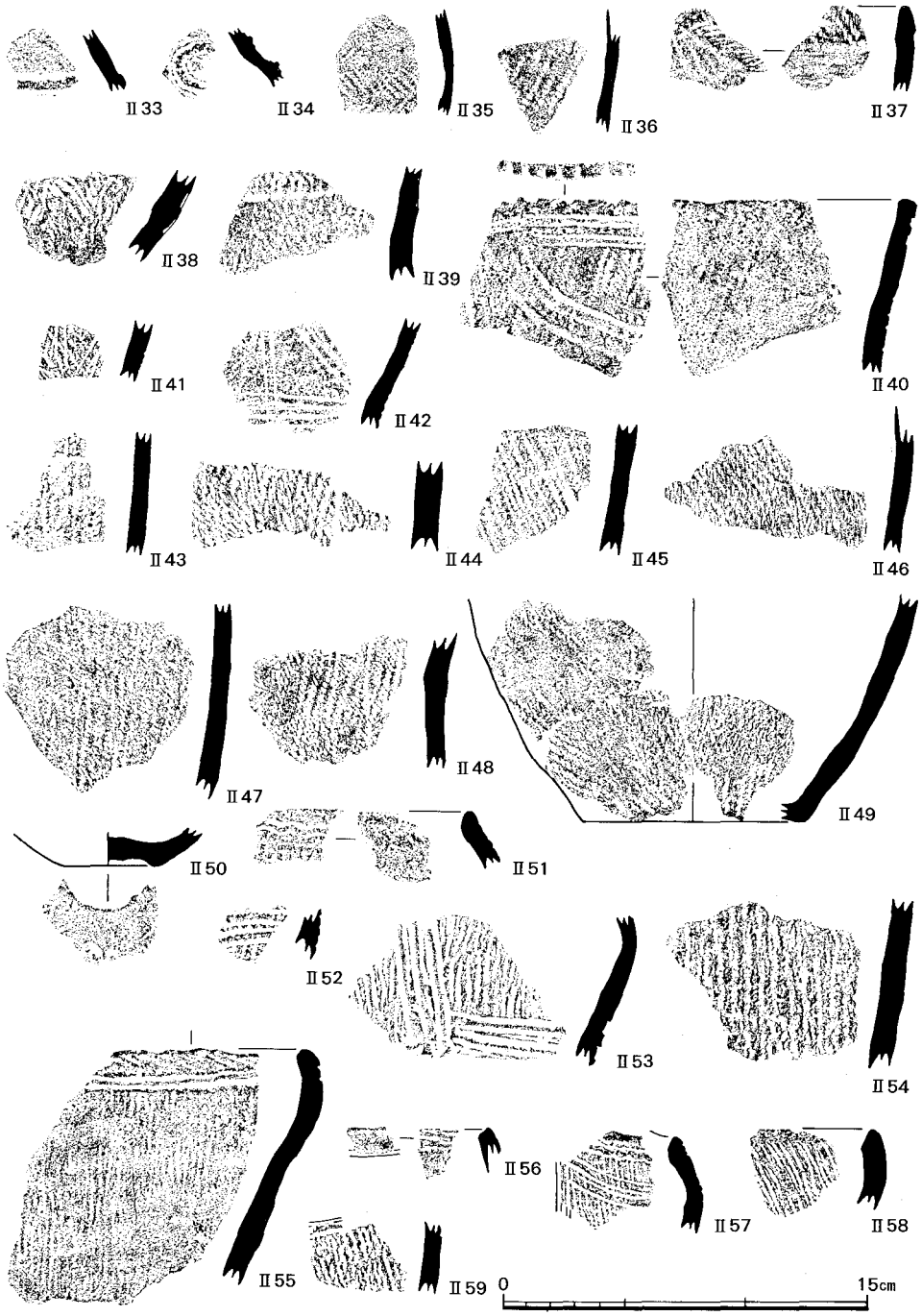


図27　白色砂礫１出土土器(1)（Ⅱ33～Ⅱ36前期，Ⅱ37～Ⅱ59中期）　縮尺1/3

が，Ⅱ38・Ⅱ39の刻みのみで隆帯を伴わない。縄文はⅡ37・Ⅱ38が右撚でⅡ39は直前段３条の左撚。Ⅱ40～Ⅱ42は船元Ⅲ式。Ⅱ40の内面の縄文は左撚で，縄文帯の幅が広く古相を呈する。Ⅱ43～Ⅱ50は船元Ⅰ～Ⅲ式の胴下部と底部で，Ⅱ43～Ⅱ46・Ⅱ49は右撚，Ⅱ47・Ⅱ48は左撚。そのうち直前段の条数のわかるものはⅡ43で，３条である。Ⅱ51～Ⅱ54は船元Ⅳ式。Ⅱ53の意匠は船元Ⅲ式のそれと同様であり，古相を呈する。Ⅱ55～Ⅱ73は里木Ⅱ式。Ⅱ55～Ⅱ58の口唇部はいずれも内側に向けた面取りがある。撚糸の撚りはいずれも不明瞭。Ⅱ55～Ⅱ57は撚糸地文上に半截竹管状工具による施文が見られる。Ⅱ59～Ⅱ62は口辺部。撚りがわかるものはⅡ59・Ⅱ61で，左撚。Ⅱ62は撚糸地文ということで里木Ⅱ式としたが，沈線の幅は通常の里木Ⅱ式のそれよりも倍以上に太く中期末に位置づけられる可能性も残る。頸部上半のⅡ63～Ⅱ66では，Ⅱ64が左撚でⅡ65は右撚。Ⅱ66はかなり摩滅しているが半截竹管状工具による２単位の連弧文の上方に絡状体の圧痕が確認できる。Ⅱ67は頸部下半。Ⅱ68～Ⅱ73は胴部で，撚りはⅡ68～Ⅱ71が左撚で，Ⅱ72・Ⅱ73は右撚である。Ⅱ74～Ⅱ76は咲畑系。口端部の欠損しているⅡ74は口縁を巡る２条の沈線間を刺突している。Ⅱ75は口辺部と思われるが内湾は緩い。Ⅱ76は連弧文を描く胴部である。

Ⅱ77～Ⅱ133は中期末の北白川Ｃ式である。Ⅱ77・Ⅱ79～Ⅱ93は深鉢Ａ類。Ⅱ79～Ⅱ82は口縁部と胴部とを隆帯で区分するもの。Ⅱ77は第135地点出土資料と接合する破片及び同一個体の破片があり，共に図示した。咲畑式の胴部の特徴を良く残した星田系の深鉢で，縄文は２段左撚。Ⅱ79・Ⅱ81も第135地点から同一個体の破片が出土している。どちらも主文様をもたないと思われるが区画文様を隆帯で分離している。縄文は，Ⅱ79は２段左撚で，Ⅱ81は直前段２条の２段左撚。Ⅱ80は右撚の縄文だが，Ⅱ83は２段左撚。Ⅱ84は直前段２条の２段左撚。Ⅱ85～Ⅱ89は縄文が施されていない。Ⅱ90～Ⅱ93は口辺部。Ⅱ90・Ⅱ91はともに縄文は２段左撚で胴部帯縄文。Ⅱ92は沈線しか確認できない醍醐系の深鉢。Ⅱ93は意匠は典型的ではないが星田系と思われる。縄文は２段右撚。Ⅱ78・Ⅱ94～Ⅱ96は深鉢Ｂ類。Ⅱ78の橋状把手は８単位に復元でき，縄文は直前段２条の２段左撚。第135地点出土資料に同一個体がある。Ⅱ94は第135地点出土資料と接合した。縄文は直前段２条の２段右撚。Ⅱ95の縄文は１段左撚。Ⅱ96は縄文が確認できず，この部分だけでは断定できないものの深鉢Ｂ類としては異例である。Ⅱ97～Ⅱ101は深鉢Ｃ類で，Ⅱ97～Ⅱ99は波頂部の正面形が台形を呈するのに対し，Ⅱ100は波頂部の正面形が三角形を呈する。縄文については，波頂部のⅡ97・Ⅱ98，波底部付近のⅡ99・Ⅱ101とも２段左撚。Ⅱ102～Ⅱ106は深鉢Ａ類ないしＣ類の胴上部で，星田系。Ⅱ102・Ⅱ105の縄文は方向は異なるがともに

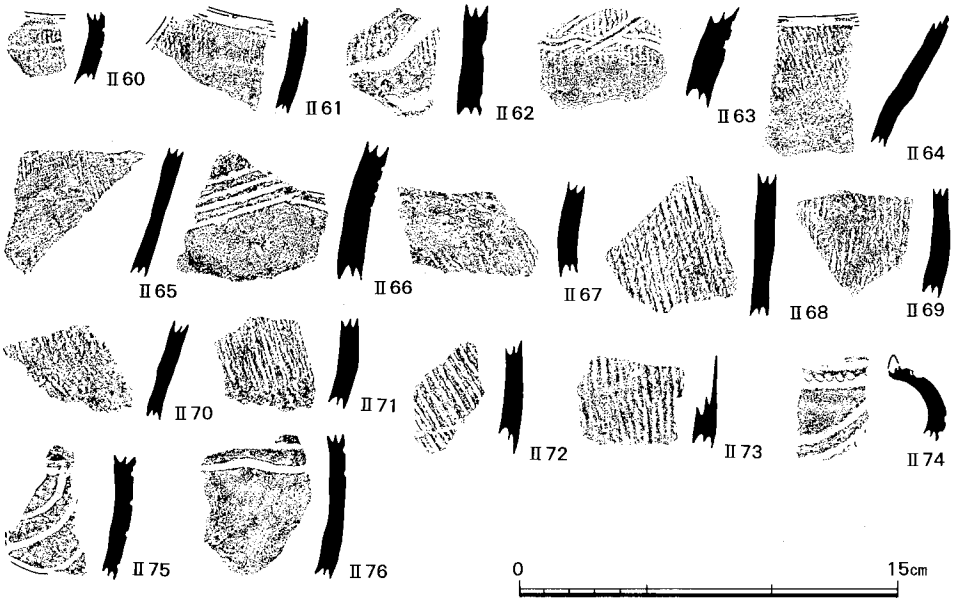


図28　白色砂礫１出土土器(2)（Ⅱ60～Ⅱ76中期）　縮尺1/3

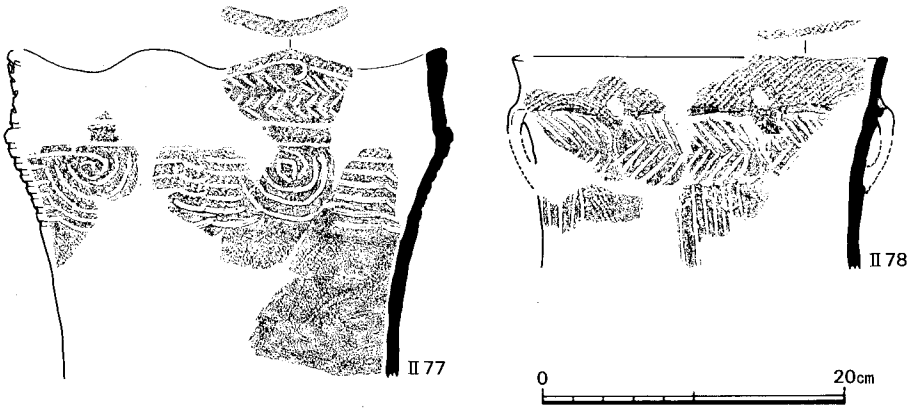


図29　白色砂礫１出土土器(3)（Ⅱ77・Ⅱ78中期）　縮尺1/5

２段左撚で，前者は直前段２条。Ⅱ107～Ⅱ115は胴下部で，Ⅱ107～Ⅱ113には縄文があり，Ⅱ107～Ⅱ110は直前段２条の２段左撚，Ⅱ111は直前段２条の左撚。Ⅱ112・Ⅱ113はともに直前段２条の１段左撚だが，底部近くのⅡ113は横走している。Ⅱ115は縄文が見られないものの底部付近であるため，本来的に縄文のない個体とは断定できない。Ⅱ116～Ⅱ126は縄文地の深鉢。Ⅱ116・Ⅱ117は内湾口縁，Ⅱ118・Ⅱ119は直立口縁，Ⅱ120・Ⅱ121は外反口縁で，どの口縁形態にも外面に縄文をもつものともたないものがある。縄文は順に，

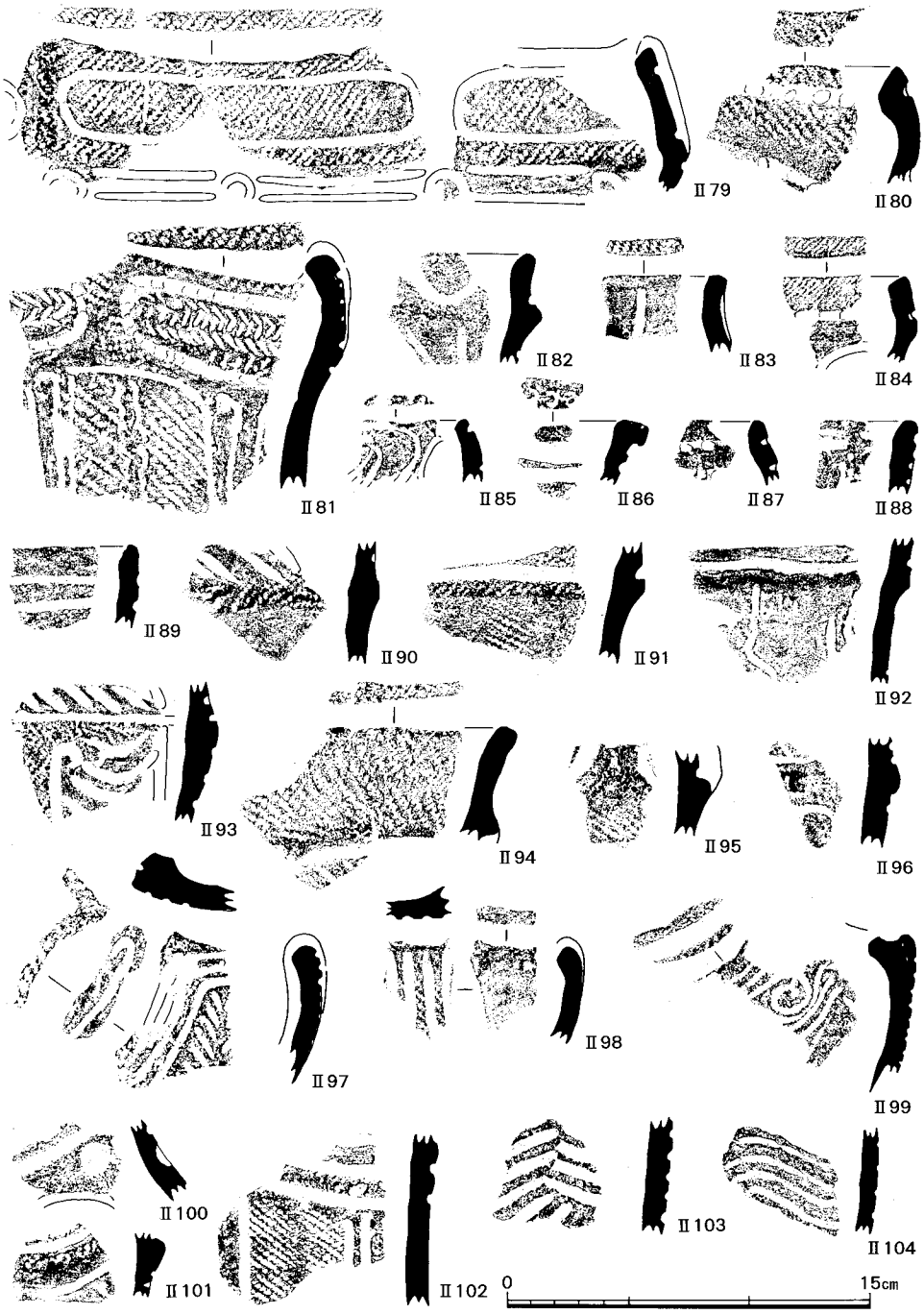


図30　白色砂礫１出土土器(4)（Ⅱ79～Ⅱ104中期）　縮尺1/3

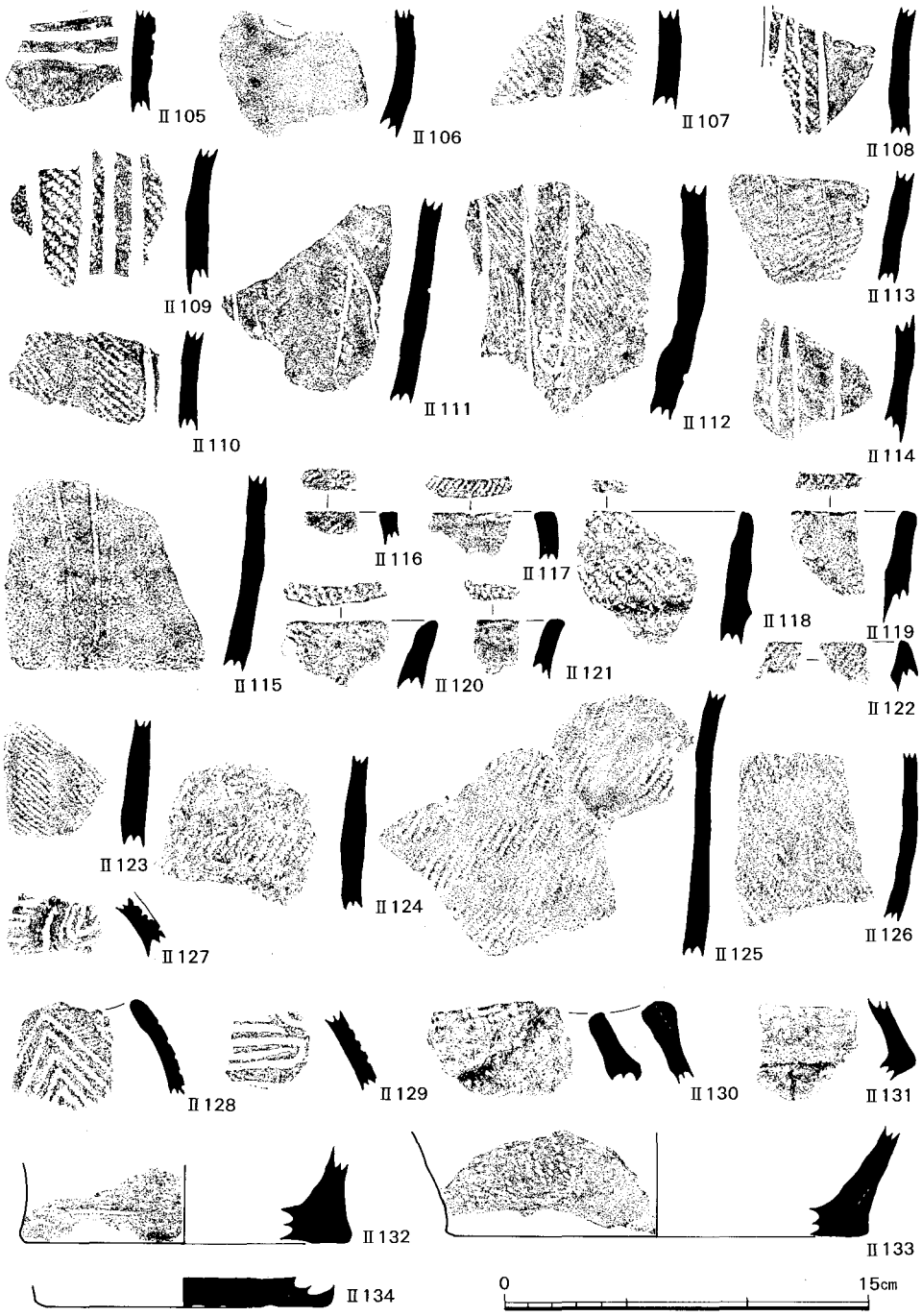


図31　白色砂礫1出土土器(5)（Ⅱ105～Ⅱ134中期）　縮尺1/3

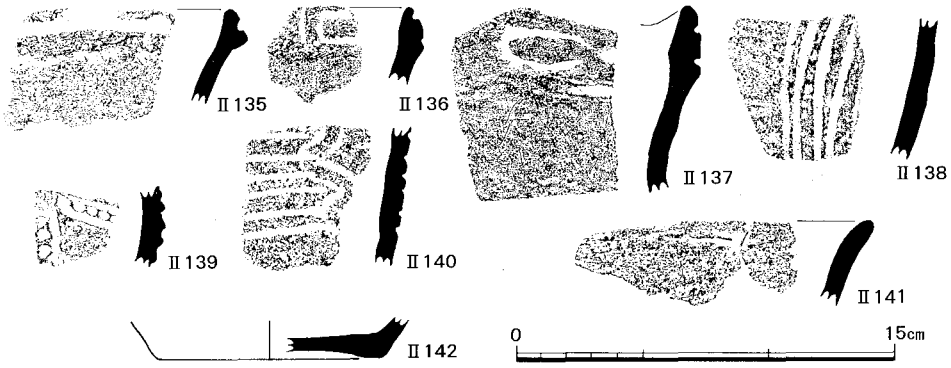


図32　白色砂礫１出土土器(6)（Ⅱ135～Ⅱ142後期）　縮尺1/3

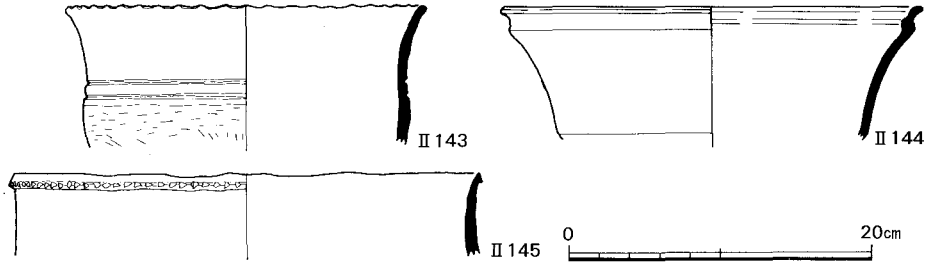


図33　白色砂礫１出土土器(7)（Ⅱ143～Ⅱ145晩期）　縮尺1/5

直前段２条２段左撚，２段左撚，直前段２条２段右撚，左撚，１段右撚，２段左撚。なおⅡ118は口縁部下に隆帯が巡る。Ⅱ122は口唇部ではなく口縁の内面に縄文を施す。撚りは２段左撚。Ⅱ123は直前段２条の１段左撚縄文による帯縄文。Ⅱ124～Ⅱ126は胴部を縄文が横走する。撚りは，Ⅱ124・Ⅱ125が直前段２条２段左撚，Ⅱ126が２段右撚。なおⅡ125は白色砂礫２から出土した破片と接合した。Ⅱ127～Ⅱ129は有文浅鉢。Ⅱ127は主文様を隆帯で区画する。Ⅱ128には左撚の縄文が確認できる。Ⅱ130・Ⅱ131は無文浅鉢で，ともに外面は丁寧な撫で。Ⅱ132～Ⅱ134は底部。Ⅱ132は外面を擦痕が横走する。Ⅱ133の縄文は直前段２条の２段左撚。

後期のものとしては，Ⅱ135～Ⅱ142があり，Ⅱ135は縁帯文土器成立期の縁帯文深鉢で，Ⅱ136・Ⅱ137は北白川上層式第１期の縁帯文深鉢。Ⅱ138・Ⅱ139も北白川上層式第１期と考えられる縁帯文深鉢の胴部。Ⅱ140は北白川上層式第２期ないし第３期のいわゆる関東系バケツ形深鉢の胴部。Ⅱ141・Ⅱ142は元住吉山式期の無文深鉢口縁と深鉢底部。

晩期のものでは，Ⅱ143・Ⅱ144・Ⅱ146～Ⅱ171は篠原式ないし滋賀里Ⅳ式である。Ⅱ143

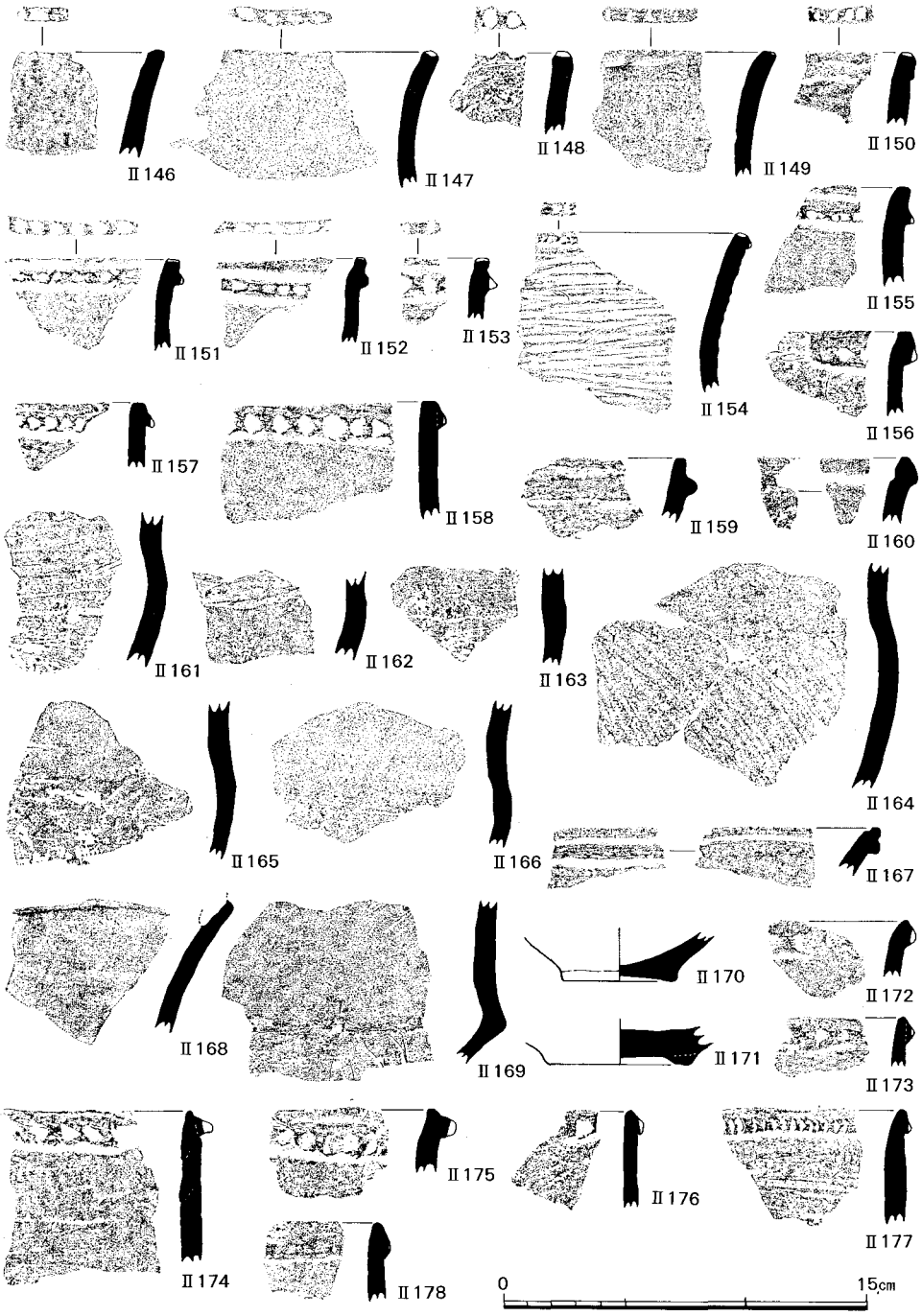


図34　白色砂礫１出土土器(8)（Ⅱ146～Ⅱ178晩期）　縮尺1/3

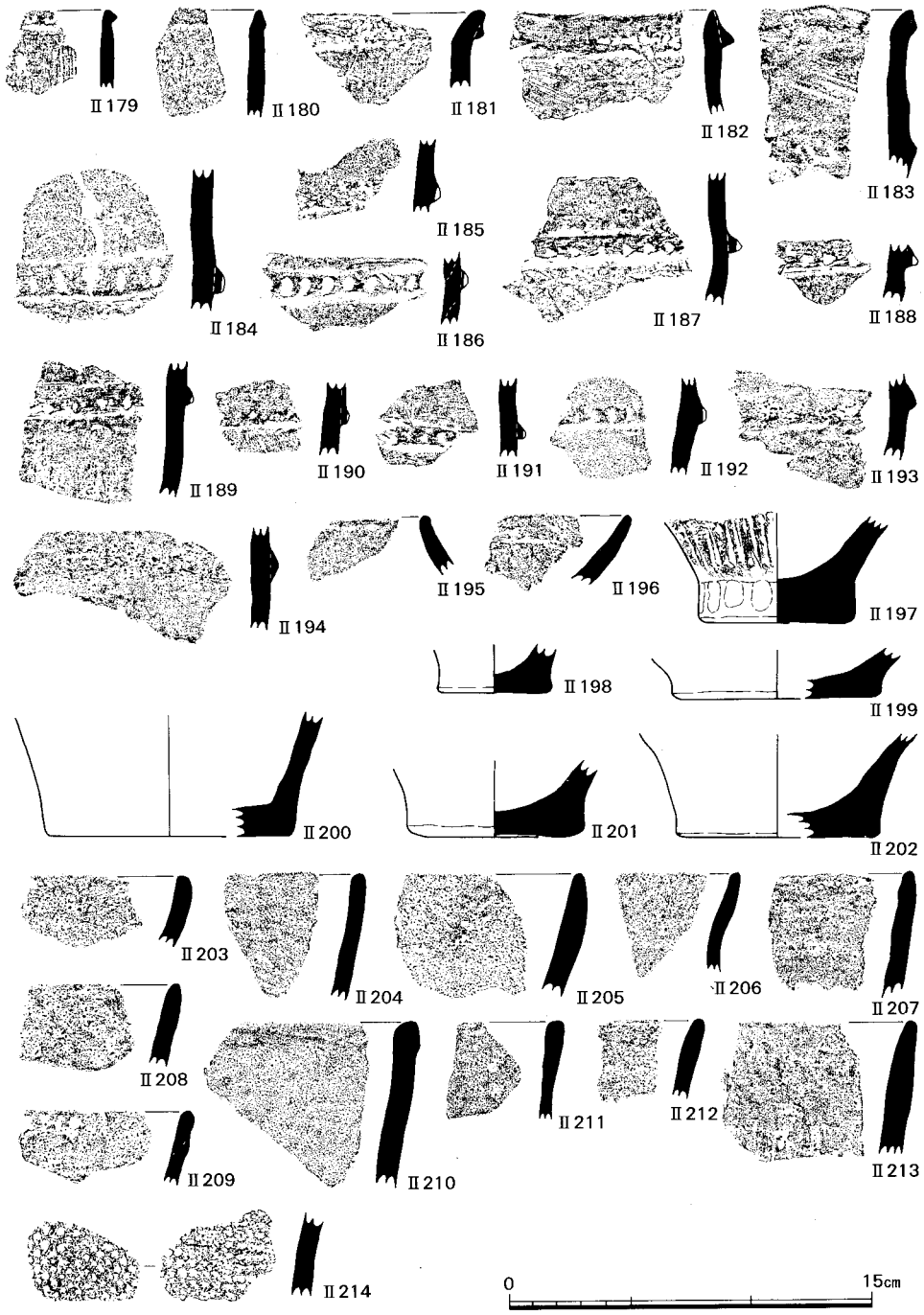


図35　白色砂礫１出土土器(9)（Ⅱ179～Ⅱ202晩期，Ⅱ203～Ⅱ213無文，Ⅱ214型式不明）　縮尺1/3

・Ⅱ146～Ⅱ150は篠原式で，口唇部の刻みはⅡ149がD字の他はO字。頸部に半截竹管による沈線が巡るⅡ143は第135地点出土資料に同一個体がある。Ⅱ150は口縁外面に突帯にはなっていないが粘土の貼付痕を残しており，新相を呈する。Ⅱ151～Ⅱ159は口唇部を面取りした滋賀里Ⅳ式。口唇部に刻みをもつⅡ151～Ⅱ154の突帯の刻みはD字。Ⅱ154は東海地方に類例の多い頸部二枚貝条痕。Ⅱ155～Ⅱ158の口唇部には刻みがない。突帯の刻みはⅡ155がO字で，他の三点はD字。Ⅱ159は口唇部にも突帯にも刻みがない。Ⅱ160は内面に1条沈線をもち，これも突帯に刻みはない。器厚と傾きから深鉢と判断した。Ⅱ161～Ⅱ166は頸部。Ⅱ144・Ⅱ167～Ⅱ169は浅鉢。Ⅱ169は胴部外面が削りだが器形から浅鉢と判断した。他の三者は内外面とも磨き。凹底のⅡ170は内外面とも磨き，高台を貼り付けて凹底にしたⅡ171は内外面とも撫でである。Ⅱ145・Ⅱ172～Ⅱ202は滋賀里Ⅴ。口縁部の突帯は，Ⅱ172がO字刻み，Ⅱ145・Ⅱ173～Ⅱ176がD字刻み，Ⅱ177～Ⅱ179はⅤ字刻みで，Ⅱ180～Ⅱ183は刻みがない。頸部二枚貝条痕のⅡ177では突帯下部にも刻み原体の圧痕が残っており，このことから原体の幅は少なくとも18㎜だったといえる。Ⅱ184～Ⅱ194の頸部の突帯の刻みはⅡ184・Ⅱ185がO字，Ⅱ186～Ⅱ190はD字，Ⅱ191・Ⅱ192はⅤ字。Ⅱ193・Ⅱ194には刻みがない。Ⅱ195は無文の浅鉢で，Ⅱ196は外面を磨く無文の椀である。Ⅱ197～Ⅱ202の底部の外面は，Ⅱ196が茎束状原体による条痕を残すが，その他は撫で。

Ⅱ203～Ⅱ213は帰属時期を特定できない無文深鉢の口縁部。いずれの内外面とも最終調整は撫で。Ⅱ214も帰属時期がわからない。内外面ともに縄文のような圧痕が確認できる。

淡褐色土1出土土器（Ⅱ215～Ⅱ230）　中期から晩期の資料がある。Ⅱ215は船元Ⅳ式。Ⅱ216・Ⅱ217は里木Ⅱ式で，口辺部のⅡ216の撚糸は右撚で，Ⅱ217は左撚。Ⅱ218～Ⅱ223は北白川C式である。深鉢A類口縁部のⅡ219の縄文は左撚で，沈線施文後に施されている。Ⅱ220は波頂部の正面形が三角形を呈する深鉢C類で，縄文は2段左撚。外反口縁の無文深鉢と思われるⅡ221の縄文は2段左撚。縄文のみの胴部のⅡ222・Ⅱ223の撚りは前者は前段2条の左撚，後者は2段左撚。Ⅱ224は後期の縁帯文深鉢の頸部。晩期ではⅡ225～Ⅱ227は滋賀里Ⅴで，突帯の刻みは，口縁部のⅡ225はⅤ字，頸部のⅡ226はO字でⅡ227はD字である。Ⅱ228～Ⅱ230は帰属時期の不明な無文の深鉢で，口縁部のⅡ228は外面が巻貝条痕状の横走条痕，Ⅱ229は外面が二枚貝条痕状の縦走条痕，Ⅱ230は篦状工具による撫で。

灰褐色土1出土土器（Ⅱ231～Ⅱ261）　中期および晩期の資料が出土した。中期のものでは，Ⅱ231～Ⅱ233は船元Ⅲ式。Ⅱ231は口唇を刻んだ後に内面に縄文を施す。Ⅱ232・Ⅱ233もⅡ231と同様に右撚の縄文地に半截竹管状工具による沈線を施すが，隆帯は確認で

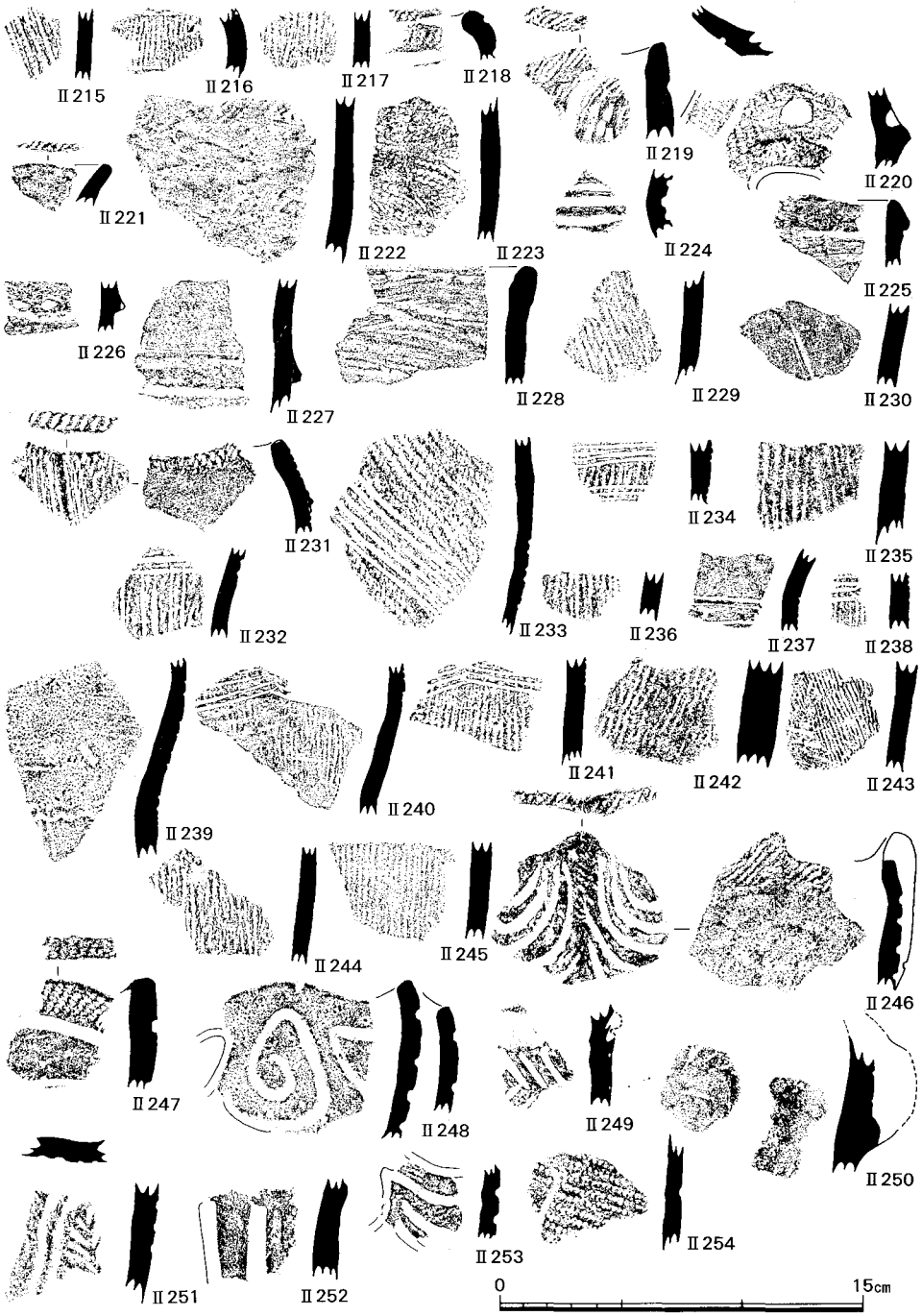


図36　淡褐色土１出土土器（Ⅱ215～Ⅱ223中期，Ⅱ224後期，Ⅱ225～Ⅱ227晩期，Ⅱ228～Ⅱ230無文），灰褐色土１出土土器(1)（Ⅱ231～Ⅱ254中期）　縮尺1/3

きない。Ⅱ234～Ⅱ236は船元Ⅳ式。Ⅱ237～Ⅱ245は里木Ⅱ式である。頸部のⅡ237～Ⅱ240はいずれも半截竹管状工具による沈線施文で，撚りがわかるものではⅡ240が左撚。胴上部のⅡ241の撚りも左撚。胴下部のⅡ242～Ⅱ245で撚りのわかるのはⅡ242～Ⅱ244で，いずれも左撚。Ⅱ246～Ⅱ257は北白川Ｃ式。Ⅱ246～Ⅱ248は深鉢Ａ類で，Ⅱ246は口縁部と胴部とを隆帯で画す。縄文は直前段２条の１段左撚。Ⅱ247の縄文は２段左撚で直前段２条と思われる。Ⅱ249・Ⅱ250は深鉢Ｂ類。Ⅱ251は深鉢Ｃ類。Ⅱ252は醍醐系の胴上部，Ⅱ253は星田系の胴上部，と思われる。後者の縄文は２段左撚。胴下部のⅡ254は，２段左撚の縄文を縦位に施した後に蛇行沈線を施す。Ⅱ255は口縁部に指頭状圧痕の巡る無文深鉢。Ⅱ256は左撚りによって撚り戻しのかかった帯縄文の胴部。Ⅱ257は直前段２条１段左撚の縄文が横走する縄文地深鉢の胴部。晩期のものでは，Ⅱ258は口唇部に半截竹管状工具による刺突の巡る篠原式である。Ⅱ259は頸部が二枚貝条痕地の滋賀里Ⅳ式で，刺突は不明瞭である。Ⅱ260・Ⅱ261は滋賀里Ⅴの頸部で，刻みは前者がＤ字で後者がＶ字。

白色砂１出土土器（Ⅱ262～Ⅱ267）　この層は偏在しており，その広がりは中央畔には及ばない。前期と中期の土器が出土した。Ⅱ262・Ⅱ263は縄文地の前期北白川下層式の胴部である。縄文は前者は２段左撚で，後者は０段多条の２段右撚。このほかは中期の土器で，Ⅱ264は船元Ⅳ式。Ⅱ265は里木Ⅱ式で，撚糸は左撚と思われる。撚糸を施した後に口縁端部に断面三角形の隆帯を貼り付けている。Ⅱ266・Ⅱ267は北白川Ｃ式。前者は深鉢Ａ類。後者は，帯縄文の胴部で，撚りは直前段２条の２段左撚である。

白色砂礫２出土土器（Ⅱ268～Ⅱ345）　Ⅱ268～Ⅱ321は中期の土器である。Ⅱ268は隆帯上をΣ字状工具で押引状に刺突している船元Ⅱ式。Ⅱ269はやや古相の船元Ⅲ式で，摩滅のために地文に縄文があるかは不明。隆帯を貼り付けた後にそのわきを半截竹管でなぞる手法は船元Ⅲ式のものだが，その隆帯上をⅡ268と同様にΣ字状工具で押引状に刺突している点は船元Ⅱ式からの過渡的様相を示す。Ⅱ270は典型的な船元Ⅲ式。Ⅱ271・Ⅱ272は船元Ⅰ～Ⅲ式の胴部。Ⅱ273～Ⅱ276は船元Ⅳ式。Ⅱ277～Ⅱ290は里木Ⅱ式。Ⅱ277・Ⅱ278は口縁部で，前者の撚りは左撚だが，後者は不明。口辺部や頸部のⅡ279～Ⅱ281で撚りがわかるのはⅡ280で，右撚。胴上部のⅡ282～Ⅱ285では，前二者が左撚で後二者が右撚。これらⅡ277～Ⅱ285の施文原体はいずれも半截竹管状工具である。Ⅱ286～Ⅱ288は胴下部で撚りは前二者が左撚で，Ⅱ288が右撚。凹底を呈する底部のⅡ289・Ⅱ290の撚りは不明。Ⅱ291は咲畑式の口辺部。Ⅱ292～Ⅱ321は北白川Ｃ式。Ⅱ292～Ⅱ299は深鉢Ａ類。Ⅱ292～Ⅱ296の口縁部で縄文がわかるのは，Ⅱ292・Ⅱ294が直前段２条の１段左撚，Ⅱ293・Ⅱ296

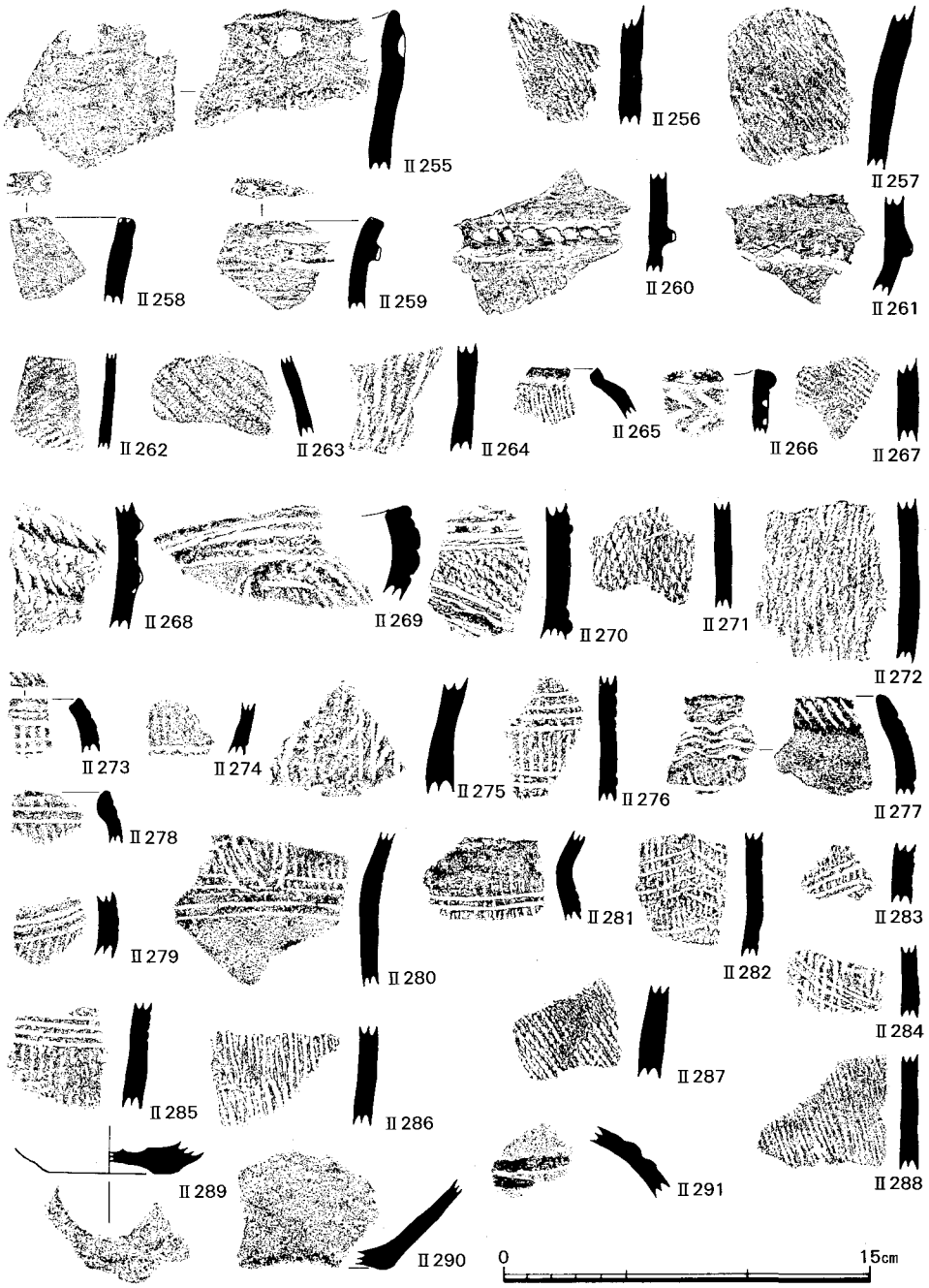


図37　灰褐色土１出土土器(2)（Ⅱ255～Ⅱ257中期，Ⅱ258～Ⅱ261晩期），白色砂１出土土器（Ⅱ262・Ⅱ263前期，Ⅱ264～Ⅱ267中期）白色砂礫２出土土器(1)（Ⅱ268～291中期）　縮尺1/3

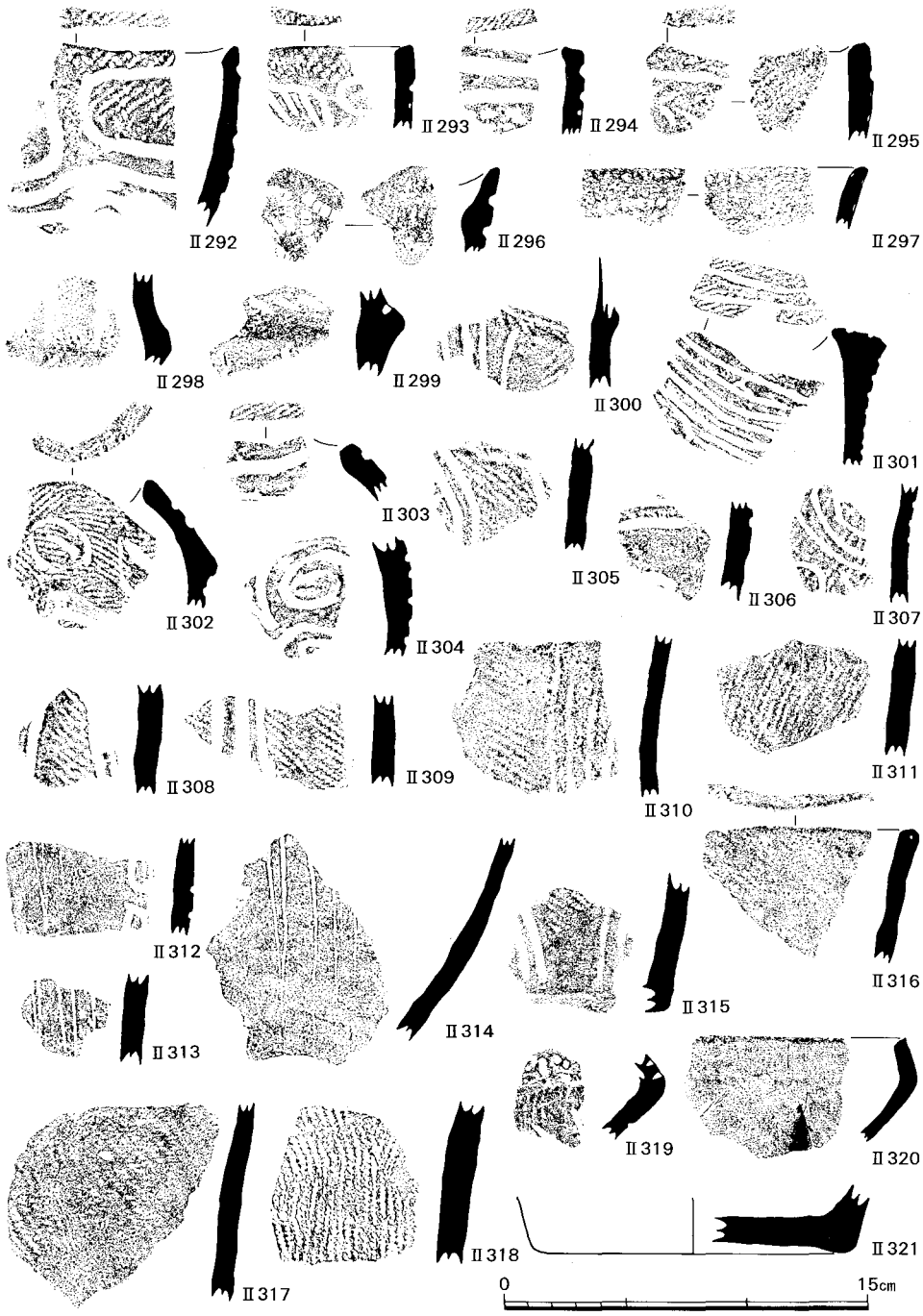


図38　白色砂礫２出土土器(2)（Ⅱ292～Ⅱ321中期）　縮尺1/3

が直前段２条の２段左撚。Ⅱ297には縄文が認められない。口辺部のⅡ298・Ⅱ299はいずれも縄文があるかは不明。Ⅱ300は，深鉢Ａ類ないしＢ類の口辺部で，縄文は２段右撚。Ⅱ301～Ⅱ304は深鉢Ｃ類。沈線施文の後に１段左撚の縄文を施すⅡ301は，波頂部が台形を呈すると思われる。Ⅱ302は波頂部が三角形を呈するもので，沈線施文の後に２段左撚の縄文を施している。Ⅱ303は波底部付近で，口唇部に左撚の縄文を施す。Ⅱ304は波頂部の主文様であろう。Ⅱ305～Ⅱ307は深鉢Ａ類ないしＣ類の胴上部。Ⅱ305は醍醐系で，縄文は直前段２条の２段左撚。Ⅱ306には縄文は確認できず，Ⅱ307は縄文があるものの撚りは不明。Ⅱ308～Ⅱ313の胴下部では，Ⅱ308～Ⅱ311が縄文をもち，その撚りは順に，１段左撚，直前段２条２段左撚，左撚，２段左撚。Ⅱ312～Ⅱ314は縄文を確認できないが，Ⅱ312は縄文のない個体としても他の二者は胴下部のため縄文がないとは断定しがたい。沈線が底部付近にまで及ぶⅡ315の縄文は２段左撚。Ⅱ316は縄文地の深鉢で縄文は２段右撚。Ⅱ317は２段左撚の帯縄文。Ⅱ318の縄文は２段左撚。Ⅱ319は有文浅鉢で，Ⅱ320は無文浅鉢。

Ⅱ322～Ⅱ341の後晩期の資料では，Ⅱ322・Ⅱ323は縁帯文時成立期の深鉢口縁である。Ⅱ324も同時期ないし北白川上層式第１期の深鉢口縁。Ⅱ325は外面細密条痕地の深鉢で，縁帯文土器に伴うものと思われる。Ⅱ326は篠原式。Ⅱ327は滋賀里Ⅳ式で，刻みはＯ字。面取りした口唇部に刻みが見られないⅡ328・Ⅱ329については，篠原式ないし滋賀里Ⅳ式と判断した。Ⅱ330～Ⅱ337は篠原式ないし滋賀里Ⅳ式の頸部。Ⅱ330は頸部で二枚貝条痕調整のものである。またⅡ331は頸胴部境の屈曲部に半截竹管状工具による押引沈線が巡る。Ⅱ338～Ⅱ341は滋賀里Ⅴである。突帯の刻みは，Ⅱ338・Ⅱ339はＤ字，Ⅱ340はＶ字。Ⅱ341には刻みがない。Ⅱ342は「く」字形口縁の浅鉢。Ⅱ343～Ⅱ345には帰属時期を特定できない無文深鉢の口縁と底部を挙げた。

淡褐色土２出土土器（Ⅱ346）　船元Ⅳ式ないし里木Ⅱ式の胴下部。

灰褐色土２出土土器（Ⅱ347・Ⅱ348）　Ⅱ347は咲畑式の口辺部で，渦文の外側には連続爪形の押引沈線が確認される。Ⅱ348は北白川Ｃ式の口辺部で，胴部は帯縄文。撚りは直前段２条の２段左撚である。

白色砂礫３出土土器（Ⅱ349）　北白川Ｃ式の胴上部で，縄文は２段左撚である。

明褐色シルト１出土土器（Ⅱ350～Ⅱ356）　Ⅱ350～Ⅱ353は北白川Ｃ式。撚りはいずれも直前段２条の２段左撚である。Ⅱ354は篠原式ないしⅣ式の頸部で，半截竹管による沈線が屈曲部を巡る。Ⅱ355・Ⅱ356は滋賀里Ⅴ。外面に炭化物が付着しているⅡ355は，口径126㎜で刻みはＤ字。Ⅱ356は口径96㎜で，肥厚した口縁外面上の刻みはＶ字である。

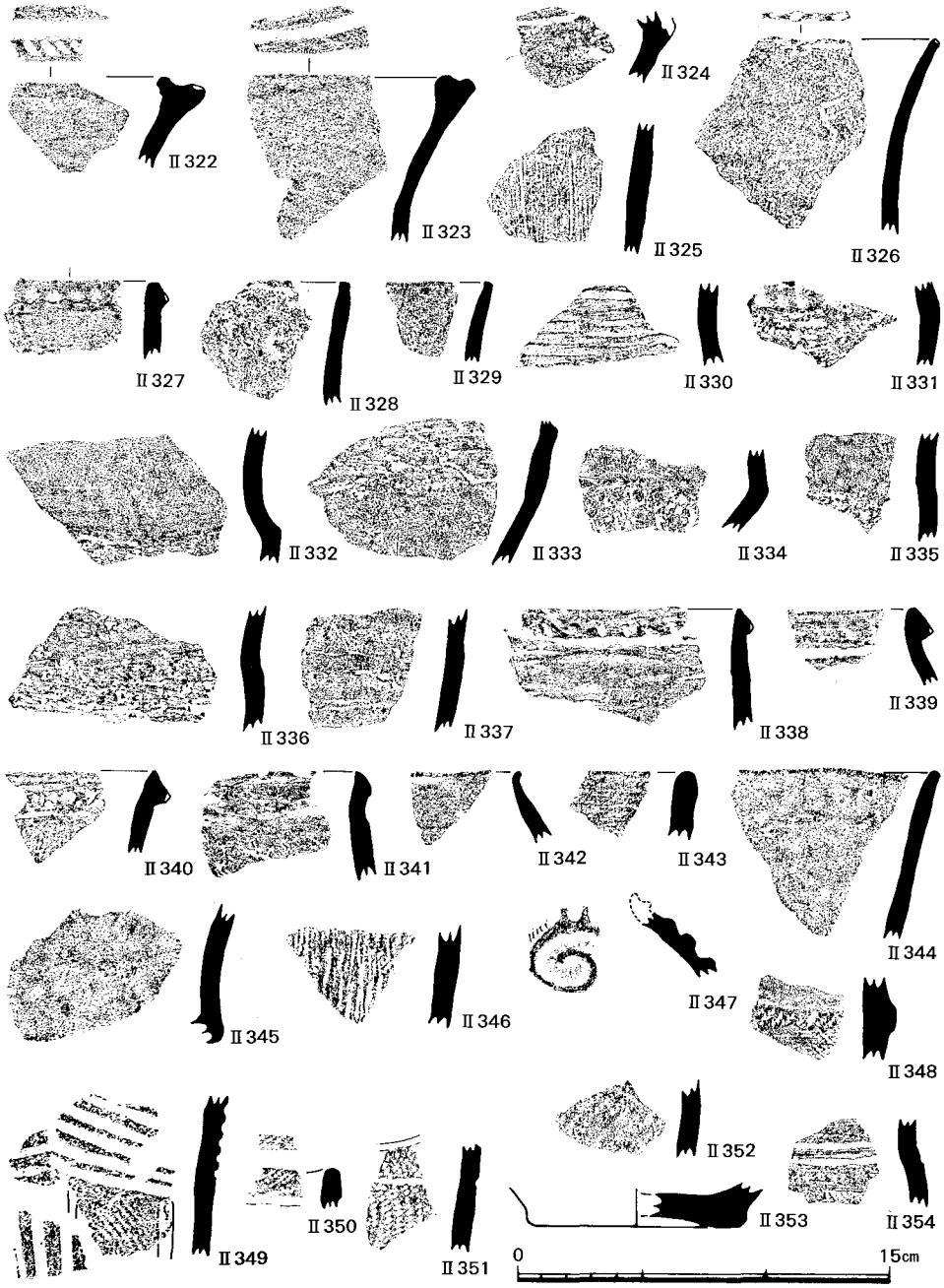


図39　白色砂礫２出土土器(3)（Ⅱ322～Ⅱ325後期，Ⅱ326～Ⅱ342晩期，Ⅱ343～Ⅱ345無文），淡褐色土出土土器（Ⅱ346中期），灰褐色土２出土土器（Ⅱ347・Ⅱ348中期），白色砂礫３出土土器（Ⅱ349中期），明褐色シルト１出土土器(1)（Ⅱ350～Ⅱ353中期，Ⅱ354晩期）　縮尺1/3

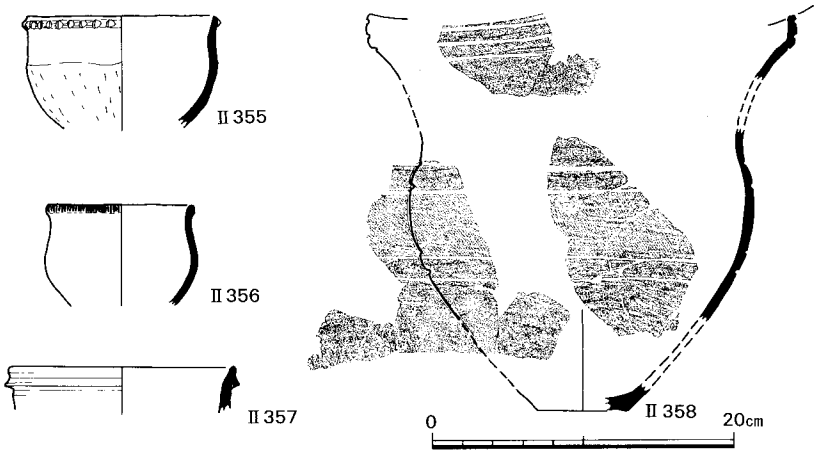


図40　明褐色シルト１出土土器(2)（Ⅱ355・Ⅱ356晩期），紫灰色シルト２出土土器(1)（Ⅱ357晩期），青灰色粘土出土土器（Ⅱ358後期）　縮尺1/5

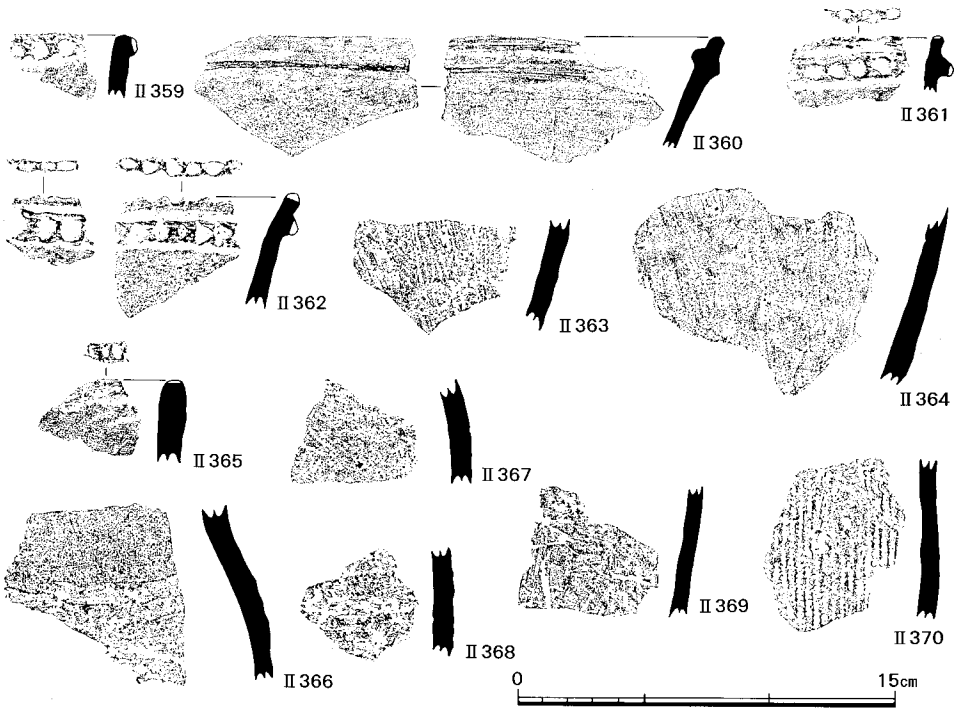


図41　紫灰色シルト１出土土器（Ⅱ359晩期），青灰色シルト１出土土器（Ⅱ360晩期），明褐色シルト３出土土器（Ⅱ361・Ⅱ362晩期），紫灰色シルト２出土土器(2)（Ⅱ363・Ⅱ364晩期），泥炭質土３出土土器（Ⅱ365～Ⅱ368晩期），紫灰色シルト３出土土器（Ⅱ369晩期），黄白色粗砂２出土土器（Ⅱ370中期）　縮尺1/3

紫灰色シルト1出土土器（Ⅱ359）　滋賀里Ⅴで，突帯はD字刻み。

青灰色シルト1出土土器（Ⅱ360）　内外面磨きの篠原式ないし滋賀里Ⅳ式の浅鉢。

明褐色シルト3出土土器（Ⅱ361・Ⅱ362）　ともに滋賀里Ⅳ式で，刻みは前者がO字で後者がD字である。

紫灰色シルト2出土土器（Ⅱ357・Ⅱ363・Ⅱ364）　Ⅱ357は滋賀里Ⅴの刻み目のない突帯文深鉢。Ⅱ363・Ⅱ364はともに外面削りの晩期の深鉢胴部である。

泥炭質土3出土土器（Ⅱ365～Ⅱ368）　Ⅱ365の口縁は篠原式である。Ⅱ366は篠原式ないし滋賀里Ⅳ式の頸部で，貯蔵穴ＳＸ４の周辺から出土した。Ⅱ367・Ⅱ368はともに外面削りの深鉢胴部で，晩期のものである。

紫灰色シルト3出土土器（Ⅱ369）　外面削りの晩期の深鉢胴部。

青灰色粘土出土土器（Ⅱ358）　主文様が欠損しているけれども元住吉山Ⅰ式と思われる深鉢で，縄文は２段右撚。口縁の屈曲部の下端に沈線が巡る点は，古相を呈する。

黄白色粗砂2出土土器（Ⅱ370）　船元式の胴下部で，縄文は直前段２条の２段左撚。

石　器　Ⅱ371は，排土から採集された茶色チャート製の剝片石器で，形態から，錐部が欠損した石錐と思われる。Ⅱ372は白色砂礫１出土のサヌカイト製の剝片石器。Ⅱ373・Ⅱ374は細部調整の認められない剝片で，どちらも暗褐色土１出土。石材は，前者が黒色チャートで後者はサヌカイトである。Ⅱ375は白色砂礫２出土の泥岩製の穿孔ある石器で，垂飾品だろう。上部は欠損しているものの，残存部の湾曲を基にその形状を推測するならば，孔部と同心の円を描いていたと思われ，従って穿孔部は器体の中央よりややずれていたと考えられる。孔部には回転による穿孔痕が確認できる。Ⅱ376～Ⅱ379は石皿で，いずれも破損しているけれども，破砕面以外の確認できる面はどの面も摩耗している。Ⅱ377が暗褐色土１から，他３点は白色砂礫２から，それぞれ出土した。石材は，撥形を呈するようなⅡ376は砂岩，Ⅱ377は花崗斑岩，Ⅱ378は斑糲岩，Ⅱ379はアプライト，である。

Ⅱ380は白色砂礫２出土の緑色岩製の磨製石斧（232.1ｇ）。欠損したと思われる基部の剝離部の摩耗を考慮すると（図版23―2），欠損後も使用されていたと思われる。刃部の最終形態は斜刃で，鋭角をなす部分には使用に伴うと思われる剝離痕がある。もとの形態が長胴の平刃だったと仮定すると，使用を重ねて刃の一端が減ったある時点で基部が欠損し，さらに後に器面を逆にして着柄し用いていた，という使用過程の復元ができるかもしれない。Ⅱ381～Ⅱ383は切目石錘。重量は順に123.1g，100.4g，43.1g。Ⅱ381・Ⅱ382は白色砂礫２出土でチャート製，Ⅱ383は泥炭質土３出土でホルンフェルス製。Ⅱ381の表面上方

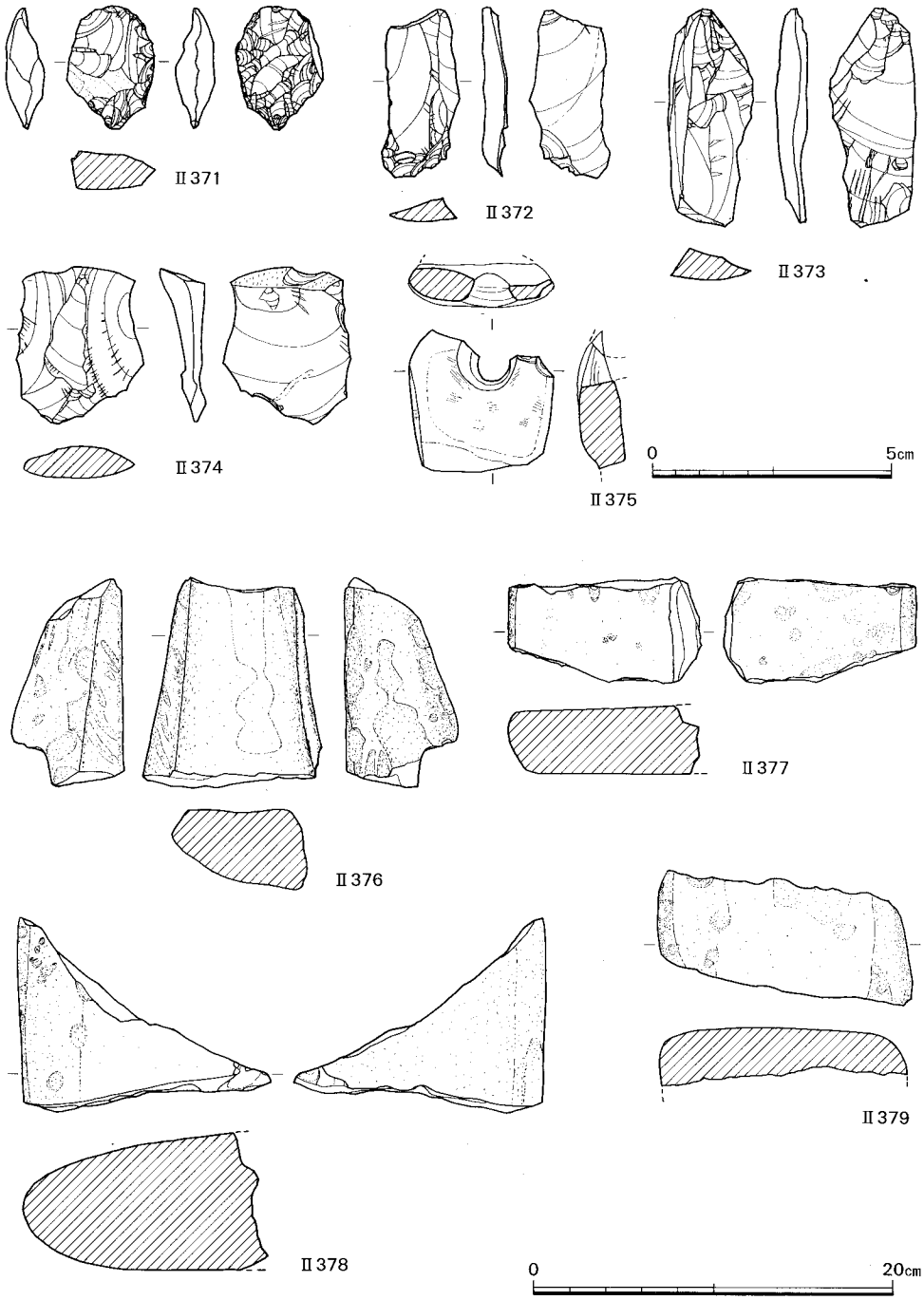


図42 石　器(1)（Ⅱ371～Ⅱ374剥片石器，Ⅱ375垂飾，Ⅱ376～Ⅱ379石皿）
縮尺　Ⅱ371～Ⅱ375：2/3，Ⅱ376～Ⅱ379：1/4

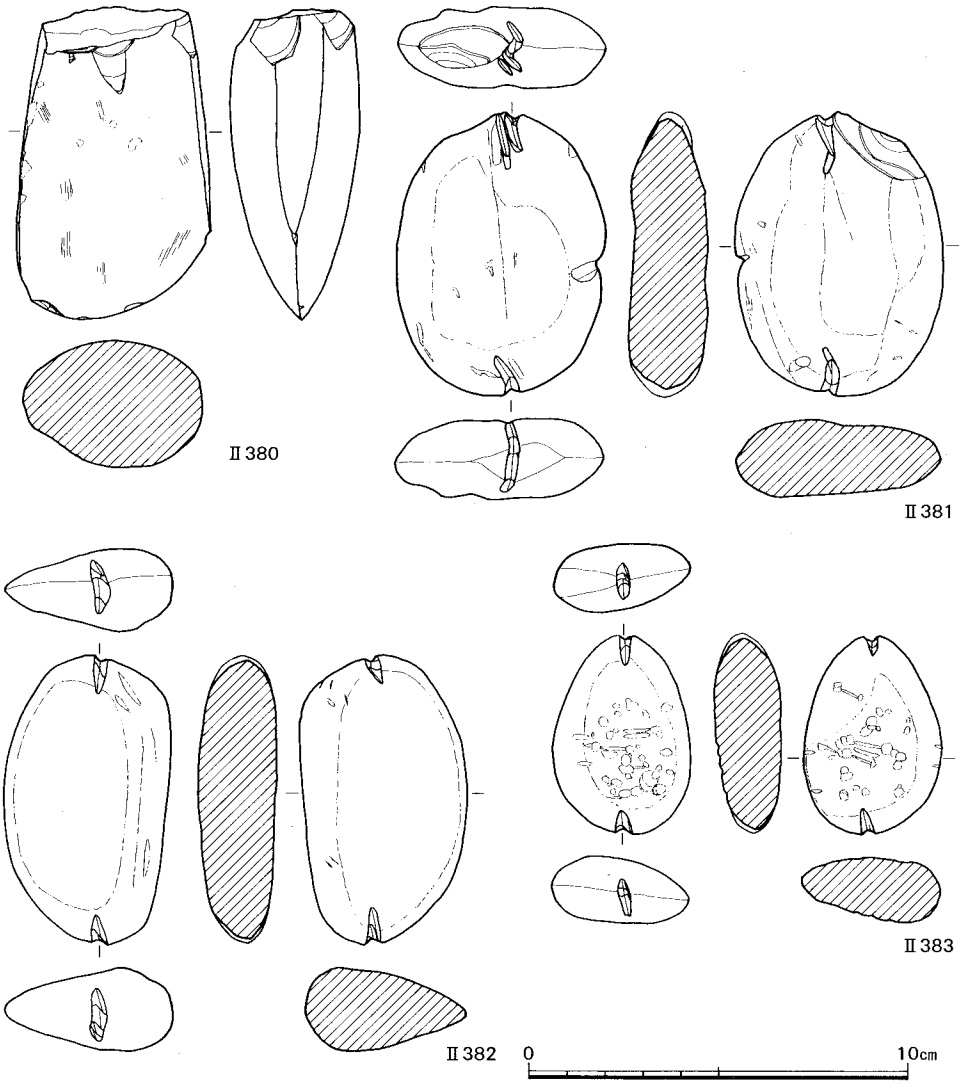


図43　石　器(2)（Ⅱ380磨製石斧，Ⅱ381～Ⅱ383切日石錘）　縮尺1/2

には2筋の切り込みが確認できるが，左側のものは製作途中で何らかの原因で器体上端が欠損した際にその箇所での切り込みを断念したものと思われる。Ⅱ383は表裏ともに敲打痕が確認でき，敲石としても機能していたことがわかる。3点の石錘に共通していることは，表裏上下の切り込みのほとんどがその軸線を左に振っていること，切り込みの断面形が正V字でなく右側の傾斜が緩いものが多いこと（図版23―2），の二点である。このことは，石錘の製作者の利き腕を解明するデータとなる可能性がある。

3　弥生時代の遺跡

(1) 層位と遺構（図版12～14，図44）

この時代の遺跡は，黄色砂（第６層）をはさんで，その上位と下位から検出された。黄色砂は，弥生前期末～中期初頭の洪水性堆積物であることが周辺地点の調査によって判明していた。今回の調査でも，黄色砂に覆われた暗褐色土（第７層）からは，弥生前期後葉の遺物が出土し，黄色砂を掘り込んで構築された方形周溝墓からは弥生中期前葉の遺物が出土し，従来の調査成果を再認する結果を得た。

黄色砂上面で方形周溝墓 SX1・SX2 と溝 SD52 ～ SD57 を検出した。方形周溝墓 SX1・SX2 は調査区西半でみつかった。SX1 は一部が調査区外へと続き，一部攪乱で破壊されていたが，溝の全形をほぼ捉えることができた。周溝を含めた規模は，東西11.5m，南北14mで，南北方向にやや長い長方形の平面形を呈する。溝は幅1.5m前後，検出面からの深さ0.6m前後で，埋土は黒褐色土（第５層）である。東辺の溝中より，弥生土器壺（Ⅱ393）が出土した。破片の多くは溝底から20cm ほど浮いた状況で出土したが，溝底に貼り付いていた破片もあり，SX1 にともなう遺物と判断してよいと思われる。

一方 SX2 は南辺と東辺の溝の一部を検出したにとどまった。南辺の溝は，SX1 と共有されており，東辺の溝は幅1.1m前後で，検出面からの深さ0.3mである。東辺と南辺の溝底の標高から判断して，SX1 の後に SX2 が構築されたものと理解できる。SX1・SX2 ともに，封土や主体部は検出されなかったが，これは古代以降の開発によって，削平を受けたためと考えられる。

方形周溝墓は，本調査区の南西60mに位置する54地点から３基みつかっている〔岡田・吉野79〕。出土遺物からみて，ほぼ同一時期の遺構であり，弥生中期前半の墓域が本調査区の西側周辺に広がることを示している。ただし詳細にみると，今回検出した方形周溝墓と54地点の方形周溝墓は，主軸の方向が約30度ずれている。したがって，これらが一連のものなのか，あるいは独立して別の墓域を構成しているのかは，周辺地区の調査を待って再考する必要があろう。

溝 SD52 ～ SD57 は，幅約0.4m，検出面からの深さ0.1～0.2mの溝が南東から北西の方向に，やや曲がりくねりながらはしるものである。溝間の距離は２m前後で，ほぼ等間隔に並んでいる。方形周溝墓によってきられており，それ以前であることがわかるが，性格は不明である。

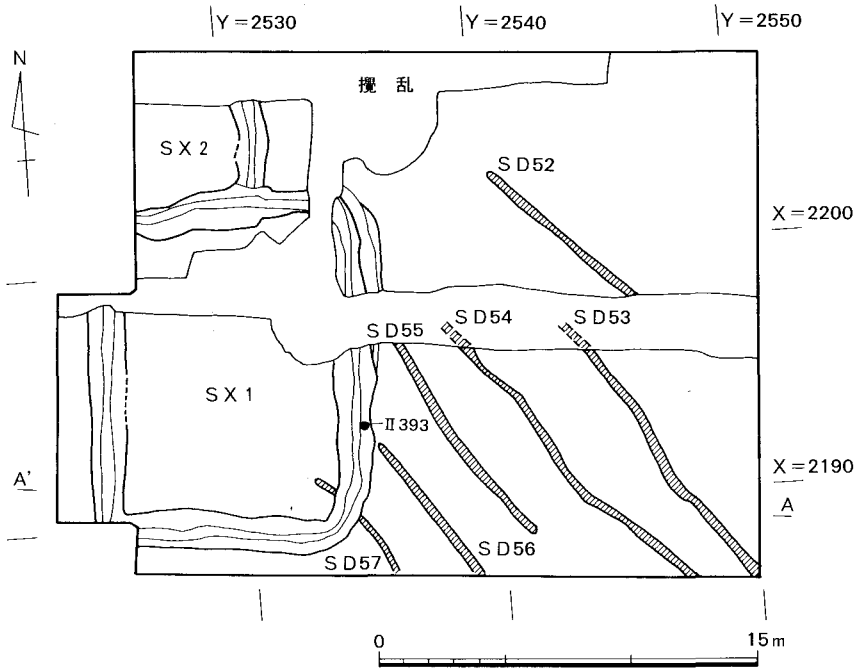


図44　弥生時代の遺構　縮尺1/300

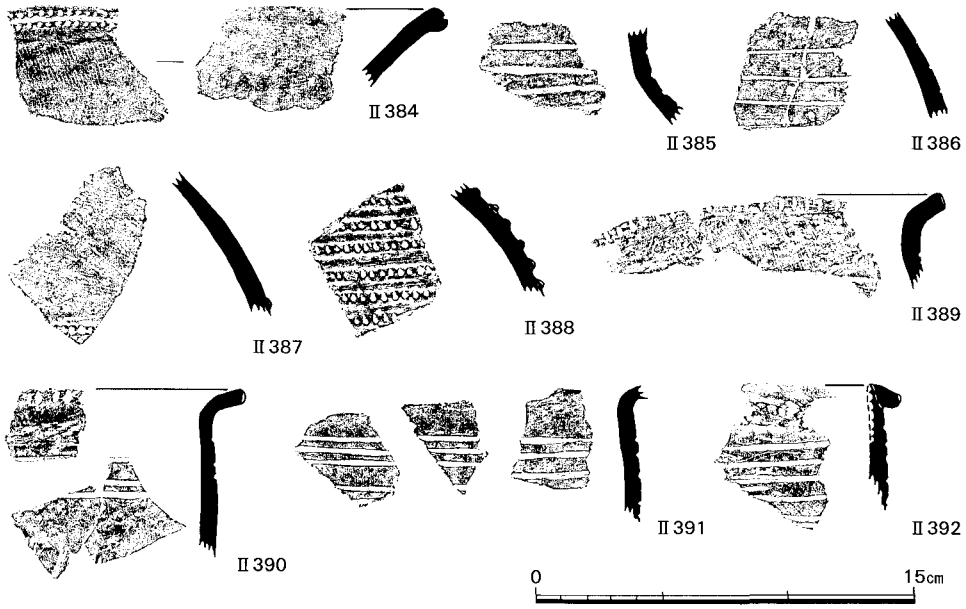


図45　暗褐色土出土弥生土器（Ⅱ384～Ⅱ392）　縮尺1/3

(2) 出土遺物（図版24，図45・46）

Ⅱ384～Ⅱ392は暗褐色土出土土器である。Ⅱ384～Ⅱ388は壺。Ⅱ384は口縁外側端部をやや肥厚させ，1条の沈線を施したのち上下に刻みを加えている。外面は縦方向の刷毛目，内面は横方向の刷毛目後，磨いて仕上げている。Ⅱ385は頸部，Ⅱ386は胴上部の資料。いずれも4条以上の沈線を横走させる。Ⅱ388は胴上部の資料で，刻みを施した貼付突帯が6条以上横走する。Ⅱ389～Ⅱ392は甕。Ⅱ389～Ⅱ391は口縁部が短く外反する。口縁端部には，縦長の刻みを施している。頸部には，篦描沈線文を施しているが，Ⅱ389は1条以上，Ⅱ390は3条，Ⅱ391は5条以上の条数が確認できる。Ⅱ392は断面三角形の突帯を口縁部に貼り付けた「瀬戸内型」の甕である。口縁端部には浅い刻みを加え，頸部には6条以上の篦描沈線文を施している。これらは弥生前期新段階を中心とする時期のものである。

Ⅱ393は，方形周溝墓東辺の溝より出土した広口の壺である。胴部以下を欠失する。口縁外側端部に粘土紐を足して，口縁端部を幅広く作る。頸部から胴部にかけて，8条1単位の櫛描直線文を9単位以上施している。外面は磨き，内面上半は刷毛目のち撫で，下半は指押さえで仕上げている。中期前葉（第Ⅱ様式）に位置付けられる。

Ⅱ394～Ⅱ396は黒褐色土出土の土器。Ⅱ394は甕。口頸部を強く外反させ，口縁端部に刻みを施している。外面は縦方向，内面は横方向の粗い刷毛目で整形している。中期前葉（第Ⅱ様式）。Ⅱ395・Ⅱ396は甕で，口縁部が受口状を呈する「近江系土器」である。Ⅱ395は内外面とも刷毛目調整の後，口縁部を撫でて仕上げる。Ⅱ396は内外面とも刷毛目調整の後，全体に撫でを加えている。頸部に1条沈線を横走させ，その下位に櫛描文を施している。後期に編年できると思われる。

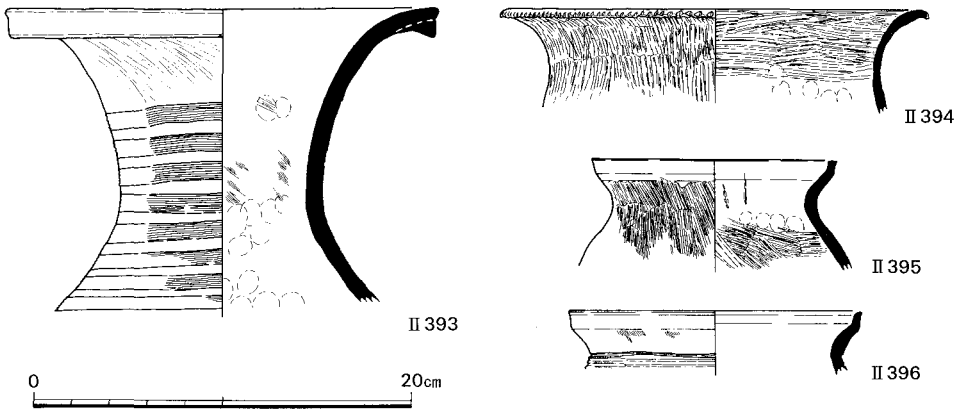


図46　SX1出土弥生土器（Ⅱ393），黒褐色土出土弥生土器（Ⅱ394～Ⅱ396）

4　古代・中世の遺跡

(1) 層　　位（図47）

現地表の標高は62.1～62.5m を示し，北東から南西に緩やかに傾斜する。基本的な堆積は，上から順に表土(第1層)，灰褐色土(第２層)，灰茶褐色土(第３層)，暗茶褐色土(第４層)，黒褐色土(第5層)である。灰褐色土と灰茶褐色土は中世の遺物包含層で，前者は14世紀後葉，後者は13世紀後葉～14世紀前葉の遺物が出土する。暗茶褐色土は，古代から中世の遺物包含層で，10世紀後葉～13世紀前葉の遺物が出土する。黒褐色土は古代の遺物包含層で，10世紀代を中心とした遺物が少量出土する。また，調査区西半の黒褐色土層上面で，同層を貫いて南北にはしる噴砂を発見した。地震による圧密液状化現象の跡と思われる。

(2) 遺　　構（図48・49）

土坑 SK10　　黄色砂上面で検出した。平面は南北3.5m 東西2.5m の隅丸方形を呈し，主軸の方位は真北から約８°東に振る。北東隅は攪乱により切られている。検出面からの深さは15cm と浅い。埋土は上層の黒褐色土を中心としたもので，各所に砂や粘質土のブロックを含む。掘形底面には，黒褐色粘質土が約3cm の厚さで部分的に遺存していた（図49断面図梨地部分)。掘形北半の底面近くからは白色土器の高杯・椀，須恵器壷が出土した。このうち高杯を除く椀や壷は，底部を下にした正位で出土した。被葬者の痕跡は認められないが，掘形の規模形状や遺物の出土状況から，墓である可能性が高い。また，掘形底面

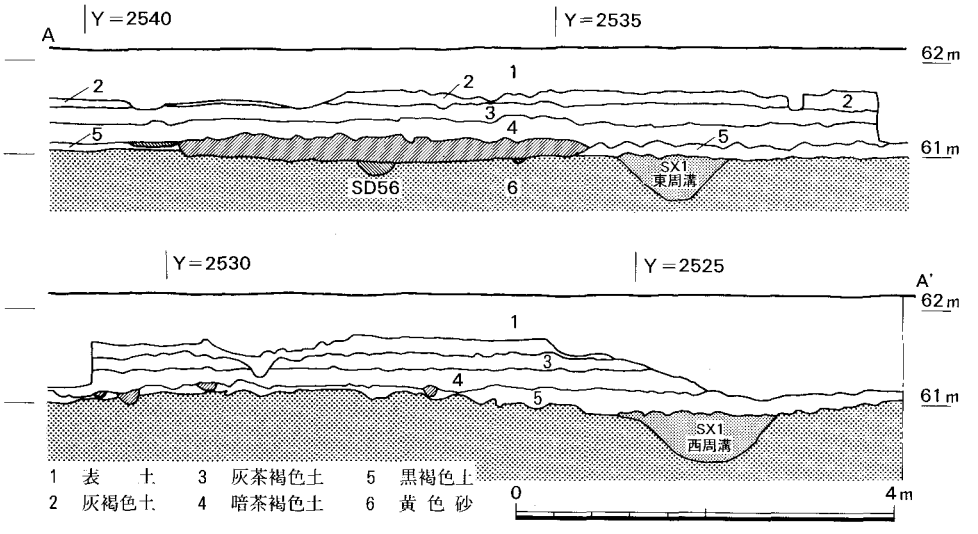


図47　層　　位　縮尺1/80

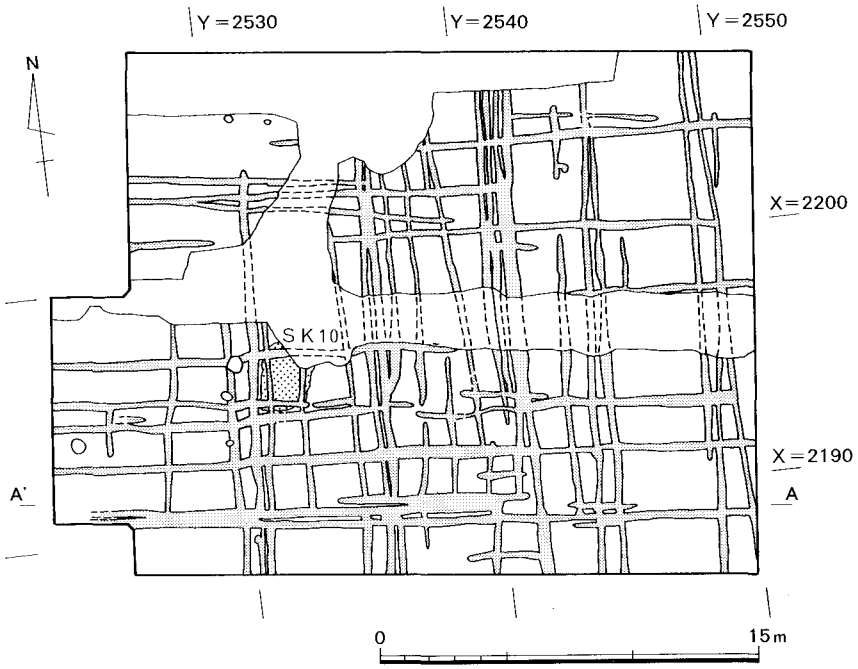


図48　古代・中世の遺構　縮尺1/300

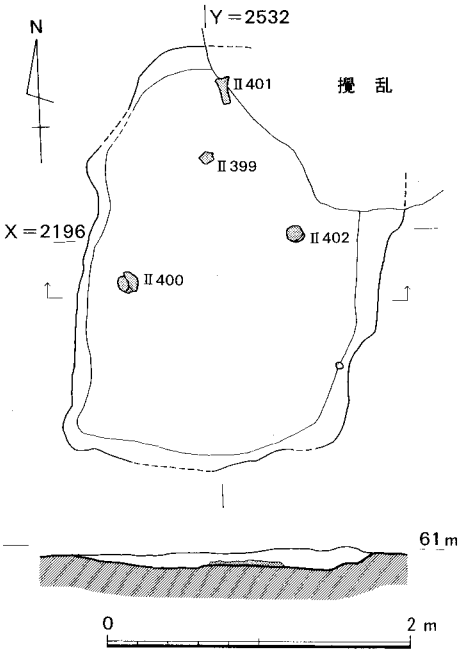


図49　土坑SK10　縮尺1/50

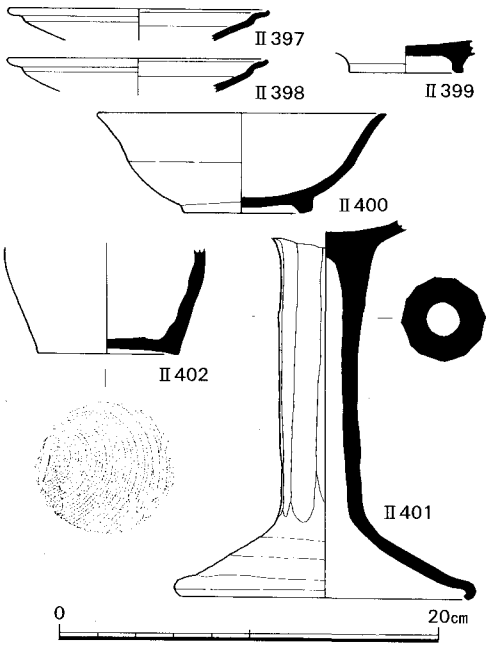


図50　SK10出土遺物（Ⅱ397・Ⅱ398・Ⅱ401土師器，Ⅱ399・Ⅱ400白色土器，Ⅱ402須恵器）

の黒褐色粘質土を木材が腐食したものとすれば，木棺墓であった可能性も指摘できる。出土遺物からみて，10世紀後葉ごろの遺構と思われる。

中世溝群　黒褐色土上面で検出した。南北または東西にはしる溝群で，調査区全面に広がっている。耕作に伴なう遺構と思われる。方位は溝の方向により若干異なり，東西の溝は真北より東に5°前後振った方向，南北の溝は真北にほぼ沿った方向を示す。溝どうしの切り合いは一部明らかにし得なかったが，おおむね東西の溝が南北の溝を切っており，後者が先行する。埋土は上層の暗茶褐色土を中心とするもので，砂のブロックが混在するものもあった。少量出土する遺物からみて，南北の溝は11世紀から12世紀前葉ごろ，東西の溝は12世紀後葉から13世紀前葉ごろの遺構と思われる。東西の溝は，135地点で検出した溝群とも良く符合する。

(3) 遺　物（図版24，図50・51）

SK10 出土遺物（Ⅱ397～Ⅱ402）　Ⅱ397・Ⅱ398は土師器皿。「て」字状口縁手法B_4類に相当し，口縁部は弱く外反し器壁が厚い。Ⅱ399・Ⅱ400は白色土器椀。いずれも軟質の土師質に焼成される。Ⅱ400は弱く外反する口縁部と削り出し輪高台をもち，外面は回転削り，内面は回転撫でによる調整を施す。Ⅱ399は底部のみ残存し，削り出しの輪高台はⅡ400よりもしっかりした造りである。両者とも内外面に煤が付着する。Ⅱ401は土師器高杯で，杯部を欠失する。胎土の色調は黄白色を呈する。脚部の成形には内側に芯を用いており，断面の外形は12角形である。裾部は内外面とも撫で調整のみで，外面には粘土紐痕が残り，裾端部は内側に強く屈曲する。Ⅱ402は小型の須恵器壺。底部に回転糸切り痕をのこす。土師質に焼成され，胎土の色調は黄白色である。肩部が頸部に向かい内傾する部位で破断し，底部のみ遺存する。底部径は7.5cm と大きく，ここから最大径10.8cm の肩部まで直線的に立ち上がっており，ずんぐりした器形に復原できよう。破断面が直線的なことから，意図的に切断した可能性も指摘できる。これらは10世紀後葉ごろの遺物である。

SX1 上層出土遺物（Ⅱ403～Ⅱ405）　SK10 の東側，弥生時代の方形周溝墓 SX1 の東周溝埋土の上層で，古代の遺物が集中して出土した。Ⅱ403・Ⅱ404は土師器皿。Ⅱ403は「て」字状口縁手法B_2類。口縁部は強く外反し器壁が薄い。Ⅱ404は２段撫で口縁手法C_1類。口縁部は弱く外反し，器壁が薄い。Ⅱ405は白色土器椀。口縁部は弱く外反する。外面は回転削り，内面は回転撫でによる調整を施す。内面全面と外面の一部に煤が付着する。SK10 出土のⅡ400とほぼ同時期の遺物である。これらは10世紀ごろのものであろう。

黒褐色土出土遺物（Ⅱ406～Ⅱ411）　Ⅱ406～Ⅱ410は土師器皿。Ⅱ406～Ⅱ408は「て」

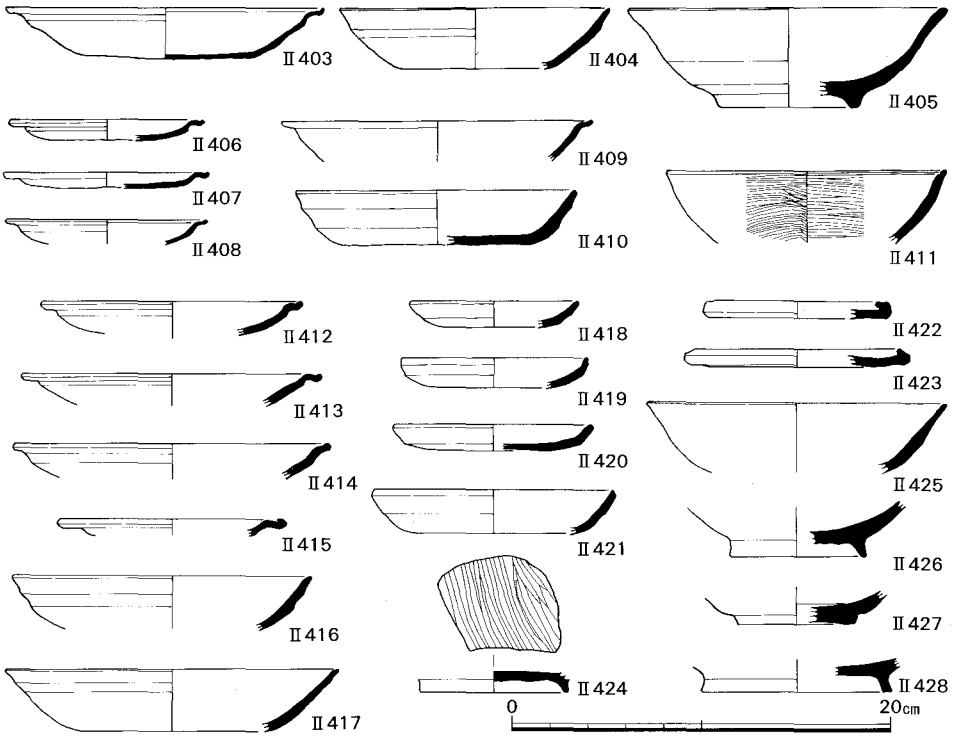


図51 SX1上層出土遺物（Ⅱ403・Ⅱ404土師器，Ⅱ405白色土器），黒褐色土出土遺物（Ⅱ406～Ⅱ410土師器，Ⅱ411黒色土器），暗茶褐色土出土遺物（Ⅱ412～Ⅱ423土師器，Ⅱ424黒色土器，Ⅱ425・Ⅱ426灰釉陶器，Ⅱ427・Ⅱ428緑釉陶器）

字状口縁手法B_2類にあたる。Ⅱ409はB_1類に相当し，口縁部の外反は弱く器壁が薄い。Ⅱ410は２段撫で口縁手法C_3類に相当し，口縁部は弱く内彎し端部は丸い。Ⅱ411は黒色土器の椀。内面のみ黒色化するが，内外面とも密に篦磨きを施してあり，Ｂ類である。口縁端部内側に沈線をもつ。これらの遺物は10世紀中葉～11世紀前葉ごろのものである。

暗茶褐色土出土遺物（Ⅱ412～Ⅱ428）　Ⅱ412～Ⅱ423は土師器皿。Ⅱ412～Ⅱ415は，「て」字状口縁手法B_2類に相当する。Ⅱ416は２段撫で口縁手法C_2類で，口縁部は弱く外反し器壁は薄い。Ⅱ417は同手法C_1類。Ⅱ418～Ⅱ420は１段撫で口縁手法D_3類に相当し，器壁は弱く内彎し端部が丸い。Ⅱ421は１段撫で口縁手法D_5類。器壁は直線的で端部を面取りする。Ⅱ422・Ⅱ423は，橙褐色を呈する土師器受皿。Ⅱ424は黒色土器Ａ類椀の底部。内面には篦磨きが施され，暗文はない。貼り付けの輪高台は高く，断面は三角形状を呈する。Ⅱ425・Ⅱ426は灰釉陶器。Ⅱ427・Ⅱ428は緑釉陶器の底部で，ともに須恵質に焼成され，釉調は淡緑色を呈する。これらは，10世紀後葉から13世紀前葉ごろの遺物である。

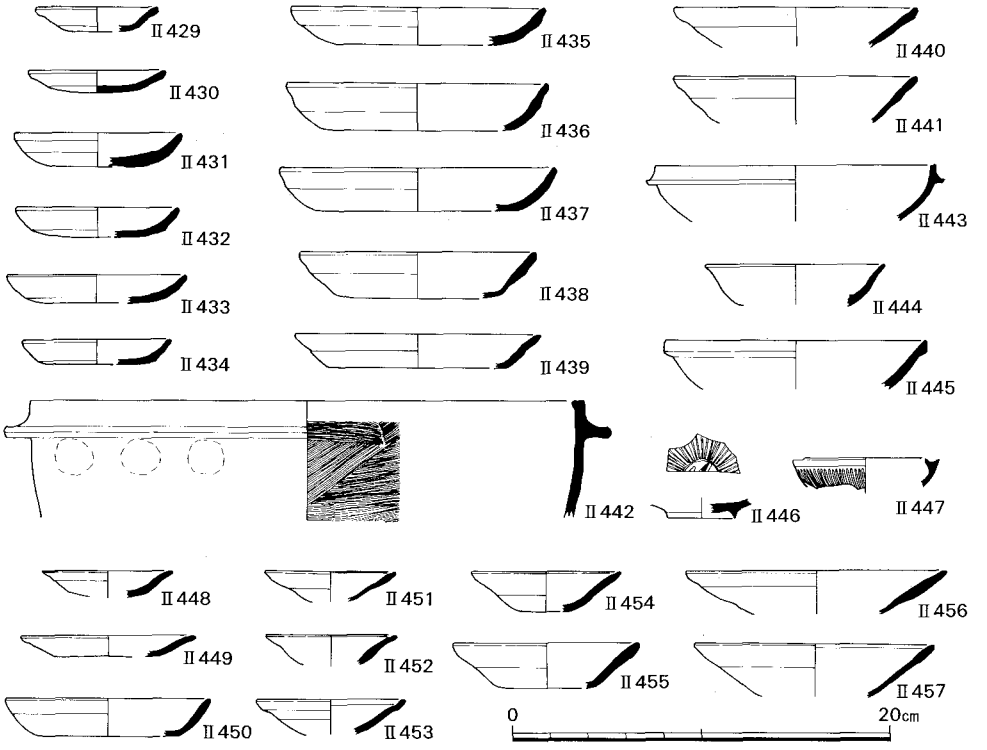


図52　灰茶褐色土出土遺物（Ⅱ429～Ⅱ441・Ⅱ443土師器，Ⅱ442瓦器，Ⅱ444・Ⅱ445白磁，Ⅱ446・Ⅱ447青白磁），灰褐色土出土遺物（Ⅱ448～Ⅱ457土師器）

灰茶褐色土出土遺物（Ⅱ429～Ⅱ447）　Ⅱ429～Ⅱ441は土師器。Ⅱ429～Ⅱ439は橙褐色を呈する土師器皿で，Ⅱ429～Ⅱ437は１段撫で口縁手法D_4類，Ⅱ438・Ⅱ439はD_5類である。Ⅱ440・Ⅱ441は乳白色を呈する土師器皿で，Ⅱ440は１段撫で口縁手法E_2類，Ⅱ441はE_1類である。Ⅱ442は瓦器羽釜。口縁部はまっすぐ立ち上がり，内面は刷毛目調整を施す。Ⅱ443は小型の羽釜。胎土は黄白色の色調で，内外面に煤は付着せず実際に使用した痕跡はない。Ⅱ444・Ⅱ445は白磁。Ⅱ444は口縁部が弱く外反する椀。端部は無釉である。Ⅱ445は口縁部が玉縁を呈する椀である。Ⅱ446・Ⅱ447は青白磁。Ⅱ446は内面に放射状の文様をもつ。Ⅱ447は合子。これらは，13世紀後葉から14世紀前葉ごろの遺物である。

灰褐色土出土遺物（Ⅱ448～Ⅱ457）　Ⅱ448～Ⅱ450は赤褐色を呈する土師器皿。Ⅱ448・Ⅱ450は１段撫で口縁手法E_1類，Ⅱ449はE_3類に相当する。Ⅱ451～Ⅱ457は灰白色を呈する土師器の皿。Ⅱ451～454はE_2類，Ⅱ455～Ⅱ457はE_3類に相当する。これらの遺物は，14世紀中葉から後葉ごろのものである。

5　出土木材の樹種同定

(1) はじめに

今回の調査区は，京都市左京区京都大学北部構内に位置し，京都大学構内遺跡のＢＦ30区にあたる。遺跡の所在地は北白川追分町遺跡の一角に属し，東に隣接するＢＦ31・ＢＧ31区の発掘調査では，縄文晩期の埋没林が検出されている。

今回の調査では，縄文晩期の泥炭質土層を中心に多くの自然木木材が出土した。このうちの101点について，樹種同定をおこなった。試料の年代は，縄文後期の１点（試料番号W101）を除き，残りの100点すべてが縄文晩期に属する。

(2) 同定の方法

試料木片から安全カミソリで，木口，柾目，板目の三断面の薄い切片を切り出し，これ

表４　出土木材の樹種同定結果

試料番号	地　点	層　位	樹　種
W１	SR2東	泥炭質土１	シイ属
W２	SR2東	泥炭質土１	シイ属
W３	BF30e5	灰色シルト２	カエデ属
W４	SR2東	泥炭質土２	ヤナギ属
W５	SR2東	泥炭質土２	ミヤマシキミ
W６	SR2東	泥炭質土２	ヤナギ属
W７	SR2東	泥炭質土２	ヤナギ属
W８	SR2東	泥炭質土２	ヤナギ属
W９	SR2東	泥炭質土２	カエデ属
W10	SR2東	泥炭質土２	ヤナギ属
W11	SR2東	泥炭質土２	ヤナギ属
W12	SR2東	泥炭質土２	ヤナギ属
W13	SR2東	泥炭質土２	オニグルミ
W14	SR2東	泥炭質土２	アカガシ亜属
W15	SR2東	泥炭質土２	トチノキ
W16	SR2東	泥炭質土２	ヤナギ属
W17	SR2東	泥炭質土２	ヤナギ属
W18	SR2東	泥炭質土２	つる性植物
W19	SR2東	泥炭質土２	ヤナギ属
W20	SR2東	泥炭質土２	ヤマグワ
W21	SR2東	泥炭質土２	アカガシ亜属
W22	SR2東	泥炭質土２	カエデ属
W23	SR2東	泥炭質土２	カエデ属
W24	SR2東	泥炭質土２	樹　皮
W25	SR2東	泥炭質土２	トチノキ
W26	SR2東	泥炭質土２	カエデ属
W27	SR2東	泥炭質土２	ヤマグワ？
W28	SR2東	泥炭質土２	トチノキ
W29	SR2東	泥炭質土２	ヤマグワ
W30	SR2東	泥炭質土２	アカガシ亜属
W31	SR2東	泥炭質土２	アカガシ亜属
W32	SR2東	泥炭質土２	ヤナギ属
W33	SR2東	泥炭質土２	散孔材
W34	SR2東	泥炭質土２	カエデ属
W35	SR2東	泥炭質土２	ヤナギ属
W36	SR2東	泥炭質土２	カエデ属
W37	SR2東	泥炭質土２	アカガシ亜属
W38	SR2西	泥炭質土３	ハコヤナギ属
W39	SR2西	泥炭質土３	ハコヤナギ属
W40	SR2西	泥炭質土３	紋様孔材
W41	SR2西	泥炭質土３	ヒノキ
W42	SR2西	泥炭質土３	ハコヤナギ属
W43	SR2西	泥炭質土３	ムクノキ
W44	SR2西	泥炭質土３	アカガシ亜属
W45	SR2西	泥炭質土３	モ　ミ
W46	SR2西	泥炭質土３	カエデ属
W47	SR2西	泥炭質土３	カ　ヤ
W48	SR2西	泥炭質土３	アカガシ亜属
W49	SR2西	泥炭質土３	アカガシ亜属
W50	SR2西	泥炭質土３	カエデ属
W51	SR2東	泥炭質土３	モ　ミ
W52	SR2東	泥炭質土３	アカガシ亜属

らをガムクロラールで封入して顕微鏡用プレパラートを作製した。光学顕微鏡で未知の試料のプレパラートを観察し，現生樹種の既存のプレパラートと細部まで対比しながら以下の樹種同定の拠点を参考にして樹種を同定した（図版25～27）。

(3) 樹種同定の根拠

カヤ（*Torreya nucifera* S.et Z.）　樹脂道を欠く。軸方向柔細胞を欠く。仮道管にらせん肥厚がみられる。

モミ（*Abies firma* S. et Z.）　正常樹脂道を欠く。軸方向柔細胞を欠く。放射柔細胞の壁は厚く，末端壁は数珠状。

ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa* Endl.）　軸方向柔細胞は晩材部に接線状に疎らにみられる。分野壁孔はヒノキ型。

オニグルミ（*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* Kitamura）　散孔材。

表4　つづき

試料番号	地点	層位	樹種
W53	SR2東	泥炭質土3	ムクノキ
W54	SR2東	泥炭質土3	ケヤキ
W55	SR2東	泥炭質土3	カエデ属
W56	SR2東	泥炭質土3	カエデ属
W57	SR2東	泥炭質土3	トチノキ
W58	SR2東	泥炭質土3	カエデ属
W59	SR2東	泥炭質土3	カヤ
W60	SR2東	泥炭質土3	アオギリ
W61	SR2東	泥炭質土3	カエデ属
W62	SR2東	泥炭質土3	カエデ属
W63	SR2東	泥炭質土3	アカガシ亜属
W64	SR2東	泥炭質土3	トチノキ
W65	SR2東	泥炭質土3	アカガシ亜属
W66	SR2東	泥炭質土3	カエデ属
W67	SR2東	泥炭質土3	カエデ属
W68	SR2東	泥炭質土3	カエデ属
W69	SR2東	泥炭質土3	カエデ属
W70	SR2東	泥炭質土3	アカガシ亜属
W71	SR2東	泥炭質土3	ヤナギ属
W72	SR2東	泥炭質土3	カヤ
W73	SR2東	泥炭質土3	トチノキ
W74	SR2東	泥炭質土3	アカガシ亜属
W75	SR2東	泥炭質土3	ヤマグワ
W76	SR2東	泥炭質土3	カエデ属
W77	SR2東	泥炭質土3	カエデ属
W78	SR2東	泥炭質土3	アカガシ亜属
W79	SR2東	泥炭質土3	カエデ属
W80	SR2東	泥炭質土3	カエデ属
W81	SR2東	泥炭質土3	アカガシ亜属
W82	SR2東	泥炭質土3	クスノキ科
W83	SR2東	泥炭質土3	クスノキ科
W84	SR2東	泥炭質土3	クスノキ科
W85	SR2東	泥炭質土3	トチノキ
W86	SR2東	泥炭質土3	カエデ属
W87	SR2東	泥炭質土3	ヤマグワ
W88	SR2東	泥炭質土3	カエデ属
W89	SR2東	泥炭質土3	アカガシ亜属
W90	SR2東	泥炭質土3	カエデ属
W91	SR2東	泥炭質土3	カエデ属
W92	SR2東	泥炭質土3	カエデ属
W93	SR2東	泥炭質土3	トチノキ
W94	SR2東	泥炭質土3	アカガシ亜属
W95	SR2東	泥炭質土3	トチノキ
W96	SR2東	泥炭質土3	カエデ属
W97	SR2東	泥炭質土3	カエデ属
W98	SR2東	泥炭質土3	カエデ属
W99	SR2東	泥炭質土3	カヤ
W100	SR2東	泥炭質土3	カヤ
W101	BF30e5	青灰色粘土	ムクノキ

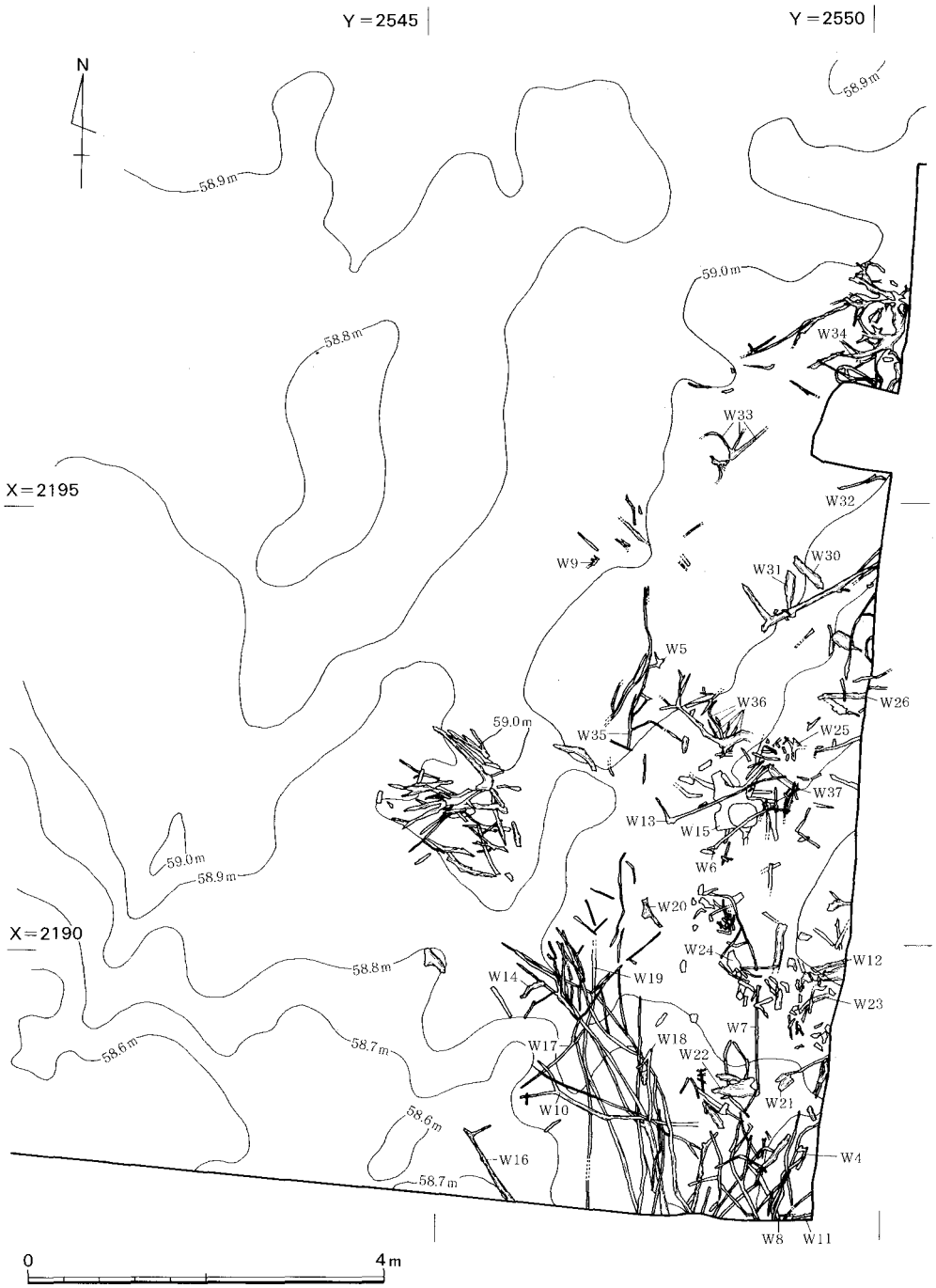


図53　泥炭質土２の木材出土状況　縮尺1/80

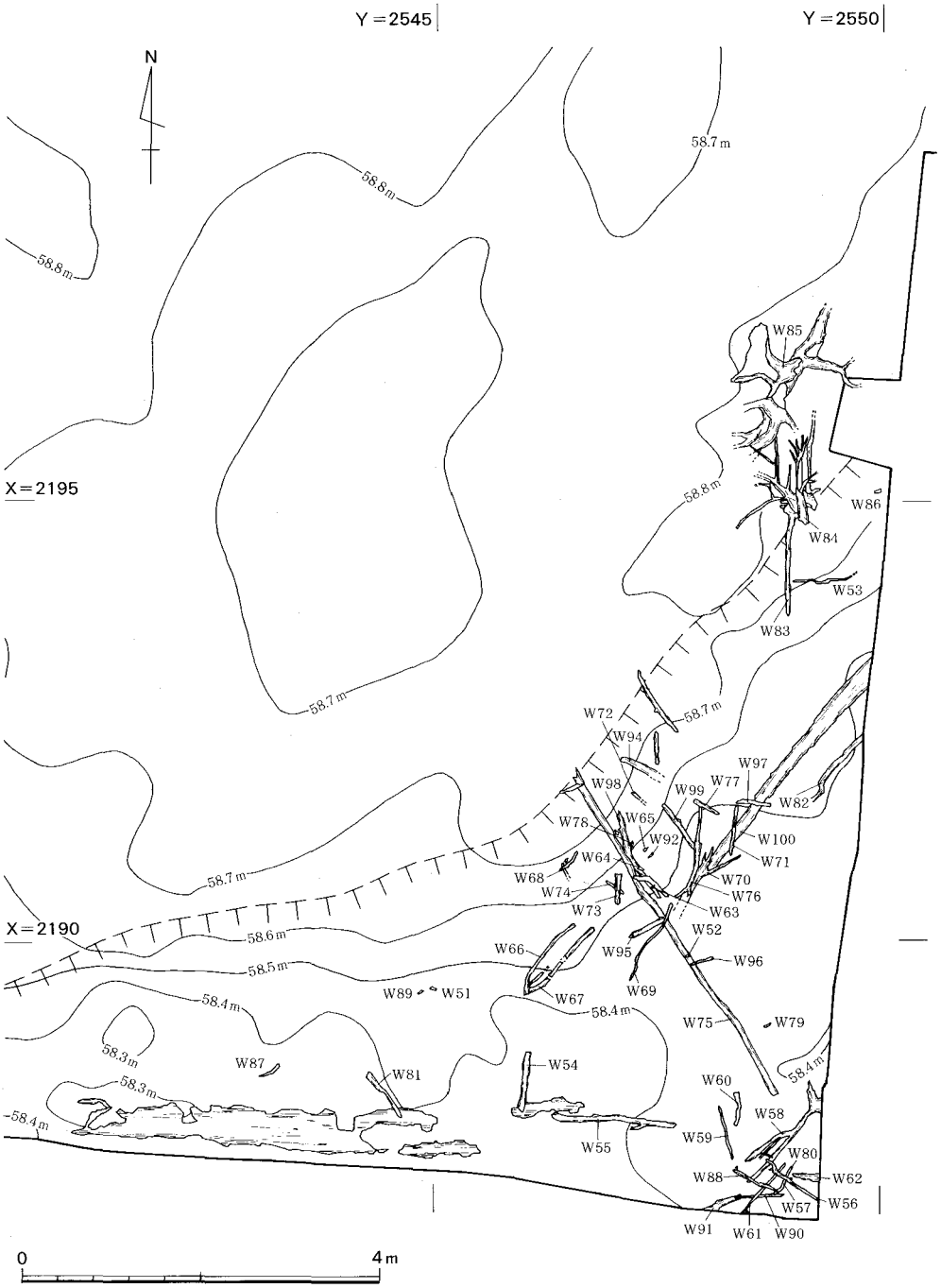


図54　泥炭質土３の木材出土状況　縮尺1/80

道管径は散孔材でも大きく，分布は疎ら。道管は単穿孔。放射組織は１－４列。

ヤナギ属（*Salix* sp.）　散孔材。道管は単穿孔。道管放射組織間壁孔は，ふるい状。放射組織は，単列異性。

ハコヤナギ属（*Populus* sp.）　散孔材。道管は単穿孔。道管放射組織間壁孔はふるい状。放射組織は単列同性。

アカガシ亜属（*Quercus* sp.,Cyclobalanopsis）　放射孔材。大形の単独道管が放射方向にならぶ。道管は単穿孔。単列放射組織と広放射組織がみられる。

シイ属（*Castanopsis* sp.）　放射孔材。年輪界に沿って疎らに大形道管が分布し，そこから大きさを減じた道管が放射方向にならぶ。道管は単穿孔。放射組織は単列。

ムクノキ（*Aphananthe aspera* Planch.）　散孔材。道管は単穿孔。道管の壁は厚い。帯状柔組織がみられる。

ケヤキ（*Zelkova serrata* Makino）　環孔材。年輪界に沿って一列に大形の道管がならぶ。小道管は斜線状に集団をなしてならぶ。道管は単穿孔。小道管にらせん肥厚。放射組織は１－８列で上下縁辺の直立細胞は大きい。

ヤマグワ（*Morus australis* Poiret）　環孔材。小道管は数個が不規則に複合する。道管は単穿孔。道管にチロースおよびらせん肥厚がみられる。放射組織は異性で１－５列。

クスノキ科（Lauraceae）　散孔材。周囲柔組織がみられる。道管は単穿孔。道管にチロースやらせん肥厚がみられる。道管放射組織間壁孔はやや小さいふるい状。放射組織は１－２列。

ミヤマシキミ（*Sikimia japonica* Thunberg）　紋様孔材。道管は単穿孔。道管放射組織間壁孔は大きい。放射組織は異性で１－２列。

アオギリ（*Firmiana simplex* W.F.Wight）　環孔材。道管は単独ないし２，３個複合する。軸方向柔細胞と木繊維はともに層階状配列を示す。道管は単穿孔。軸方向柔細胞は周囲状，翼状ないし連合翼状となる。放射組織は異性でさや細胞が存在する。

カエデ属（*Acer* Sp.）　散孔材。道管は単独ないし２，３個複合する。道管は単穿孔。道管にらせん肥厚がみられる。木繊維の壁厚の違いにより木口面で独特の模様がみられる。放射組織は同性で１－６列。

トチノキ（*Aesculus turbinata* Blume）　散孔材。道管は単穿孔でらせん肥厚を有する。放射組織は単列同性。本来は放射組織が顕著な層階状配列を示すが本遺跡出土のトチノキはあまり顕著でない。

表5　樹種別の出土件数

カヤ	5点	アカガシ亜属	17点	カエデ属	30点
モミ	2点	ケヤキ	1点	アオギリ	1点
ヒノキ	1点	ヤマグワ	5点	つる性植物	1点
ヤナギ属	13点	ムクノキ	3点	紋様孔材	1点
ハコヤナギ属	3点	クスノキ科	3点	散孔材	1点
オニグルミ	1点	トチノキ	9点	樹皮	1点
シイ属	2点	ミヤマシキミ	1点		

紋様孔材　道管は単穿孔を有し，水平に巻くらせん肥厚がみられる。道管と放射組織の直立細胞との間の壁孔は大型のレンズ状。放射組織は異性で1－2列。日本産の紋様孔材にはヒイラギ，その他のモクセイ類，コクサギ，クロウメモドキ，ミヤマシキミ，ロウバイなど限りがあるがいずれも一致しない。

散孔材　やや大型の道管が分布するが樹種は特定できないので散孔材とした。

つる性植物　環孔材。大型の道管が孔圏を形成する。大型で高さの極めて高い放射組織がみられるが樹種は特定できない。

樹　皮　針葉樹由来か広葉樹由来か不明なので，単に樹皮とした。

(4) 樹種同定の結果

樹種同定の結果は表4に示す。この結果を樹種別にまとめると表5の通りである。

出土数量の多い樹種をみると針葉樹ではカヤ5点，広葉樹ではカエデ属30点，アカガシ亜属17点，ヤナギ属13点，トチノキ9点，ヤマグワ5点，ムクノキ3点，クスノキ科3点，ハコヤナギ属3点，その他となる。

以前に同じ北白川追分町遺跡に含まれる京都大学理学部物理学科校舎東南の平坦な空き地での試掘調査で，嶋倉は黒褐色泥炭質層Ⅰでは総数61点のうちイズセンリョウ15点，アカガシ亜属とサルナシがそれぞれ9点，カエデ属6点，その他の樹種を同定し，黒褐色泥炭質層Ⅱでは総数72点のうちアカガシ亜属48点とカエデ属8点が多く出土していることを報告している〔嶋倉85〕。また，伊東らは同じ北白川追分町遺跡での調査で，総数58点のうち針葉樹ではカヤ6点，広葉樹ではトチノキ10点，アカガシ亜属とカエデ属がそれぞれ9点，ほかにヤナギ属，ヤマグワ，キハダ，ムクノキ等の樹種を同定している〔伊東・林・島地85〕。

以上のように，過去の北白川追分町遺跡出土樹種の傾向を参考にして，本調査結果を考えると，針葉樹ではカヤ，広葉樹ではアカガシ亜属，カエデ属，トチノキが共通して多く生育していたことが推定される。

6　昆虫遺体

(1) はじめに

北白川追分町縄文遺跡に含まれる，京都大学北部構内BF30区の泥炭質の地層から出土した多数の昆虫遺体を検討した。1994年度に発掘されたもので，いずれも縄文晩期のものである。

これらの昆虫遺体は，発掘の関係者によって検出され，土をつけたままの小ブロックの状態で，角型のプラスチックケースに収納されていた。かなりの遺体が既に乾燥していたが，70％のエチルアルコールと少量のフォルマリンを加えて，湿潤状態にした。

結局，104個のケースサンプルから，現在までに134点の昆虫遺体を検出することができた。この数には，同一個体に属することが明らかな節片や破片の数を含めていない。保存状態はかなり良く，二次的な破壊を余り受けておらず，同定は比較的容易であった。同定に当たっては，大阪市立自然史博物館の収蔵標本と比較しながら行なった。

(2) 同定の結果

昆虫遺体の出土点数と，検出された134点の同定結果は，表6に示した通りである。これらのうち，主なものの写真を図版28・29に示す。

出土した昆虫は，2目12科34種以上にのぼり，疑問種も含め，種まで同定できたものは24種に上った。また，前々回〔日浦・宮武85〕，前回〔BF31区調査団87〕には発見されず，今回初めて出土した種は，15種に上った。全体として，最も多かったのは食植性・訪花性コガネムシ類で57％，ついでオサムシ科10％，ハムシ科6％，カメムシ類5％，ほかにハネカクシ類，シデムシ類，タマムシやコメツキ類などが，わずかずつ出土している。

最も下位の紫灰色シルト層からは，コガネムシ科の遺体が14点（破片）出土したのみで，他のものは検出されなかった。泥炭質土3の層準からは最も多く出土し，92点が出土している。オサムシ科，コガネムシ科，カメムシ類が多い。泥炭質土2の層準からは28点出土し，糞虫類，コガネムシ科，ハムシ科などが多く出土している。泥炭質土2・3は，ともに植物遺体層で，泥炭質土3からはトチの実の貯蔵穴（SX4）が発見されている。

今回も，前回と同様に，目立ちやすい大型の，金属光沢を持つものが多少とも選択的に採取されたと思われる。コガネムシ科の遺体が最も多いことが，それを物語っており，タマムシやオサムシなどの甲虫，金属光沢を持つツノアオカメムシなども，同様な理由で採取されたと考えられる。従って，今回の資料が堆積当時の昆虫相を平均的に表していると

表6　昆虫遺体の同定結果

昆　虫　名	泥炭質土2	泥炭質土3	紫灰色シルト	合計
コウチュウ目（鞘翅目）Coleoptera				
マヤサンオサムシ *Carabus maiyasanus*		3		3
オサムシ科の1種 *Carabidae*		5		5
*オオゴミムシ *Lesticus magnus*	2			2
*オオナガゴミムシ？ *Pterostichus fortis*？		1		1
*スジアオゴミムシ *Haplochlaenius costiger*		2		2
*アオゴミムシの1種 *Chlaenius* sp.		1		1
*エンマムシ科の1種 *Histeridae*		1		1
シデムシ科の1種 *Silphidae*		2		2
*コガシラハネカクシ属の1種 *Philonthus* sp.	1			1
ハネカクシ科の1種 *Staphylinidae*		1		1
*オオセンチコガネ *Geotrupes auratus*	1			1
*エンマコガネの1種 *Onthophagus* sp.	1			1
*マグソコガネの1種 *Aphodius* sp.		1		1
コカブトムシ *Eophileurus chinensis*	1			1
コガネムシ *Mimela splendens*	4	2		6
*ヒメスジコガネ *Mimela flavilabris*		1		1
*オオスジコガネ *Mimela costata*		1		1
スジコガネ *Mimela testaceipes*		1		1
スジコガネ？ *Mimela testaceipes?*		2		2
アオドウガネ *Anomala albopilosa*	1			1
ヒメコガネ *Anomala rufocuprea*	1	6		7
コガネムシの1種 *Anomala* sp.	3	6	14	23
カナブン *Rhomborrhina japonica*	3	1		4
アオカナブン *Rhomborrhina unicolor*		16		16
ハナムグリ *Eucetonia pilifera*		2		2
*アオハナムグリ *Eucetonia roelofsi*		5		5
コアオハナムグリ *Oxycetonia jucunda*	2	6		8
タマムシ *Chrysochroa fulgidissima*		1		1
*サビキコリ *Agrypnus binodulus*		1		1
*ウバタマコメツキ *Paracalais berus*	1			1
アカガネサルハムシ *Acrothinium gaschkevitchii*	4	1		5
*キクビアオハムシ *Agelasa nigriceps*	1			1
ハムシ科の1種 Chrysomelidae	1	1		2
ゾウムシ科の1種 Curculionidae		1		1
甲虫の部分・破片 Coleoptera parts and fragments		15		15
カメムシ目（半翅目）Hemiptera				
アカスジキンカメムシ *Poecilocoris lewisi*		1		1
ツノアオカメムシ *Pentatoma japonica*	1	5		6
合　計	28	92	14	134

*印は今回の発掘で初めて出土したもの

は考えられないが，種のレベルまで同定できた種が多かったことから，古環境の推定には，かなり役立つものと思われる。

前々回〔日浦・宮武85〕の報告で，昆虫遺体が密集（約97点ほど）する部分が発見され，フクロウ類などのペリットではないかと指摘したが，今回も，これと似たようなサンプルが6点ほど見つかっている。これらについては，まだ精査ができていないので，後日検討した上，報告したい。

(3) 考　　察

① マヤサンオサムシ，オオセンチコガネ，コカブトムシなど，森林性の昆虫がかなり発見されていることから，よく茂った森林が広がっていたと考えられる。照葉樹林～落葉広葉樹林に多いアカスジキンカメムシの出土も，森林の広がりを示唆している。

② オオセンチコガネ，エンマコガネの一種，マグソコガネの一種など，シカなど獣の糞を食する甲虫の出土から，やや大型の獣類が生息していたと考えられる。

③ コカブトムシは，成虫・幼虫ともにカシなどの朽木に潜っているので，朽木の多い環境であったと思われる。

④ コガネムシ科の種では，コガネムシ，ヒメスジコガネ，ヒメコガネ，アオドウガネなどの食葉性のもの，ハナムグリ，アオハナムグリ，コアオハナムグリなどの訪花性のもの，カナブン，アオカナブンなど樹液に来るものが多いところから，林縁や二次林など，やや明るい環境もかなり存在したのであろう。スジコガネ，オオスジコガネは，針葉樹の葉を食害するところから，スギなどの針葉樹林の存在が示唆される。

⑤ ツノアオカメムシは，ニレ類，ケヤキ，ミズナラ，イタヤカエデ，カエデ類など，主として冷温帯の広葉樹を食樹としているところから，集水域の上流に冷温帯林が広がっていたか，あるいは，当時の気候が現在よりやや冷涼であったことも考えられる。このことは，やや山地性のアオカナブンがかなり出土していることからも，支持される。

⑥ タマムシの出土は，成虫の食樹であるエノキの存在を示すものであり，幼虫は枯れ木の材に潜るところから，そのような枯れ木が多い環境であったと考えることができる。

⑦ アカガネサルハムシは，ノブドウ，エビズルなど林縁に多いブドウ科の植物につくことから，上記の④と同じように，やや開けた林の環境があったと考えられる。

⑧ キクビアオハムシは，ノリウツギやサルナシを食樹とするので，そのような樹種が混じる林の環境があったと考えられる。

⑨ ウバタマコメツキは，マツの切り株や枯れ木に発生するところから，アカマツなどの存在，マツ林の存在が示唆される。

⑩ オオゴミムシ，オオナガゴミムシ，スジアオゴミムシ，サビキコリなど，平地にごく普通に見られる甲虫が多いところから，開けた平地や川原などの環境もあったと思われる。

⑪ 水成の堆積物であるにも拘わらず，水生甲虫の遺体が全く出土していない。これは，水生甲虫は小さくて黒っぽい種類が多いため，発掘時に発見され難かったということもあ

ろうが，湿地や止水域などの環境が余り無かったためではないかと推定される。

⑫　泥炭質土３から出土した昆虫遺体の種類数も点数も多いところから，この層準の堆積時の環境がより多様であったと考えられるが，サンプル量が同じではないので，厳密には言えない。泥炭質土２の方からは，平地性のオープンな所に多い甲虫や，糞虫類などがより多いことから，より人為度が高いと言えそうであるが，確かではない。

全体として，幼虫時代に湿った朽木・枯れ木・腐植などに生育する昆虫が多いことから，朽木・枯れ枝・腐植が多い，よく茂った森林が広がっていた印象を受ける。また，一方では人為による（？）オープンな環境も存在したことが推定できる。

7　小　　結

今回の調査では縄文時代から中世にいたる遺構・遺物が発見され，この地一帯の土地利用の変遷を解明する多くの手がかりを得ることができた。

縄文時代に関しては，晩期の埋没林，貯蔵穴を検出した。埋没林は，本調査区の東に隣接する56・135地点で検出された埋没林と一連のものであり，扇状地の末端部分にとりつく流路内に保存されたものであることが明らかとなった。この流路の西側斜面で，晩期中葉篠原式ごろの貯蔵穴を１基発見した。南東に下る斜面をほぼ垂直に掘り込んだだけの簡単な構造のものであるが，外果皮を取り外した約2,000個のトチノキの種子が良好に保存されていた。西日本で多数発見されている「低湿地型貯蔵穴」であり，この地に居住した縄文人の生業形態や空間利用を復元するうえで，貴重な資料となろう。

なお，縄文土器の整理過程で，比較検討のため135地点出土資料の再整理を行なった。この結果とそこから派生する問題については，本年報第Ⅱ部に掲載したので参照されたい。

弥生時代に関しては，中期前葉の方形周溝墓を２基検出した。同時期の方形周溝墓は，BE29区でも３基見つかっており，弥生中期前半の墓域が本調査区の西側周辺一帯に広がることを示唆する重要な資料となった。

発掘調査および整理調査は，千葉・古賀・吉田広が担当し，磯谷敦子・矢野由記子・柴垣理恵子・冨井眞・大石崇史・坂田昌平・安見昌幸が測量・実測などの作業にあたった。また，以下の方々より有益なご教示を賜りました。末尾ながら記して，感謝申し上げます。堆積物に関して，冨田克敏氏・那須孝悌氏。種実類に関して，南木睦彦氏。縄文晩期の土器に関して，家根祥多氏。石器石材に関して，大賀克彦氏。